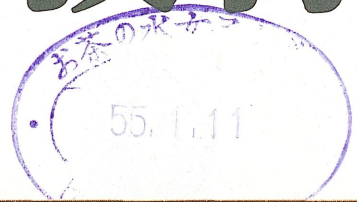


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

2



第七十九卷 第二号 日本幼稚園協会

幼児教育の基本を考えるために

新刊



自主性を育てる保育

立川多恵子・著

B6判／216頁／定価1,000円 円160円

自主性を育てるとはどんなことなのか、ひとつの事例を通していろいろな角度から話し合われていて、保育を原点に戻して考えさせられる好著です。



私の生活保育論

本吉圓子・著

A5判／328頁／定価1,200円 円200円

《どこの園でも今までこうしてきたから》と従来の保育に慣れきっている保育者に贈る問題提起の書。カリキュラムで子どもを追いたてない保育を実践記録で示します。

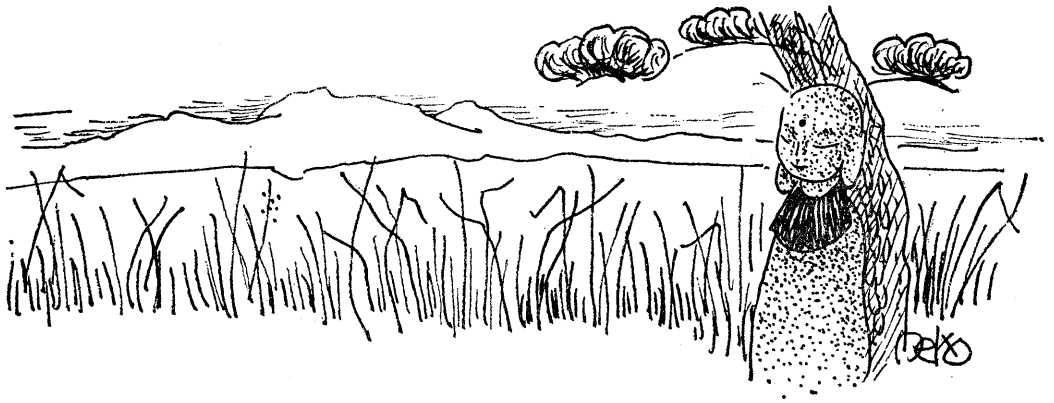
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育

第七十九卷 第二号





幼 児 の 教 育 目 次

——第七十九卷 二月号——

表紙 駒宮 録郎
カッ ト 中 島 英 子

瞬間の出会い……………河 辺 杲……………(4)

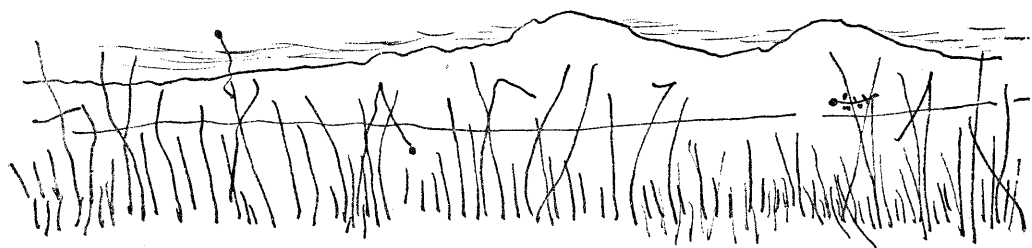
ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十七)……………海老沢 敏……………(6)

私の保育……………船 津 和 子……………(13)

私の幼児教育論(二)……………小 川 博 久……………(18)

☆行事の報告……………(24)



◇映像からの接近◇……………(40)

遊びと子どもの発達③……………加古里子(41)

★倉橋賞受賞論文

音楽取調掛編纂「幼稚園唱歌集」における

欧米幼稚園唱歌・学校唱歌のとり入れ方……………藤田芙美子(44)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(三十一)……………津守真(56)

瞬間の出会い



河 辺 杲

ある日、三歳児のクラスの子どもたちが砂場で遊んでいるのに心ひかれて近づきA男くんの側にしゃがみ込みますとA男はちらっと私を見ましたがすぐに水ようかんの空鐘のようなものに砂を手でつめて、ぼんぼんと手のひらで叩くようにして砂場の枠のところに鐘をふせて鐘の型のものを作りました。前日に水をうっておいであったようで表面だけは少し白く乾いています。砂の中の方は黒く湿っていますから鐘の型押しをすると鐘型の砂のかたまりの下の方は湿った砂で鐘の型がしっかりと出来るが、上の方は砂が乾いているためすぐくずれてしまいます。それでもそのことを気にしていないかのように二、三個見ているうちに作っていききました。私はいつの間にかA男の行動に誘われるように同じ容器を手にして同じことをはじめようとしたましたが、同じまねをするのであれば……湿った砂でしっかりとした美しい型のものを作った側に作れば、何か感じるかも知れない……と考え側に作ってみました。が少しも反応なく同じことをくりかえしています。そのう

ちに……とも考え作りつつけていました。

ちょうどその時B君が側に立って私とA男の砂の型押し遊びを見ているのに気がついたので、「ほくもやりたいのであればいっしょにやろうよ」と誘おうと思ったのですが、ふと見ると片手に小さなスコップをもっているのに気づき自分でなにかやろうと思っているかも知れないと思いなおしてそのままにして遊びをつづけました。A男はその間四、五個作ってはこわしてまた同じことをくりかえしていました。何分が過ぎて私の肩を小さな手が叩くのでふり返えるとさき程のB男だったので、「何か」とたずねると私の側にしゃがみ込んだかと思うと小さなスコップを力強くポンと砂の上にふせるようにして叩き、そのスコップをさっと上げて砂のところにスコップの型ができたのを指さしてほらおじさんのしているのはこういうことだろうと言わんばかりに私の顔をじっと見つめています。「おやおもしろい型を見つけたね」というと今度は立って片脚で思い切り砂をふんでパッと脚をあげ靴型ので

きたのを指さし「ほら」とこんな型もできるよと見せてくれました。「あら、ほんとうにおもしろいこと考えたね」と言っただけで、A児とB児がたのしそりにスコップや靴の型おしを砂の上に作っているのをながめ考えこんで終いました。A児がはじめた鐘の型押しそれに参加して同じことをはじめていた私たちの型押しの原理のようなものをB児がいつの間にか直観的に把握しているのに、啞然として終ったのです。湿った砂でしっかりと美しい立体をつくることへ指向させようと考えてみたり、じっと立って見ている子どもに同じ経験をさせてみようと思ったりもしたことは全く違った角度からのものと新鮮な、しかもものの本質や行為の原理に近いような子どもたちの行為の意味発見に驚かされて日頃保育の中で保育者がつ指導目標や経験内容や誘導などの指導方法が平板な型通りのものに終って終うのもこの辺にあるのではないかとあらためて考えさせられたわけです。

その後しばらくして手で砂を握りかえしかけていたA男は園庭のすぐ近くにある鉄道を列車が通過するのを察知して、すぐ手をとめ中腰のようにかがみこんだ姿勢になって列車の方をじっと見すえ「客車だ」とつぶやいてしゃがみました。その瞬間私は前の灌木で列車が見えていないのに気づいて「よく見えた」とたしかめてみました。するとまだ通過している途中だったので今度はつと立ち上がり背のびをするようにしてじっと見つめてやおらしやがみ「見えた」とぼつり言っただけで再び砂掘りをはじめました。私のことばかけに再度A男はいかにもつまさき立つたかのよう

にして見なおしましたが彼の背の高さ以上にある灌木に前方をふさがれて列車は全然見えていなかったのです。

彼が観たものは音だったのだと気づかされなにかじつと音の方を見すえた時の姿は星見童子の立像のように印象づけられ「観音」ということをあらためて考えさせられたわけです。

この日は三歳児のA君とB君との瞬間とでもいいようなわずかの時間の出会いの中でいろいろ感じさせられ考えさせられた一日だったわけですが、最近私はよく写真家の人たちが常に心がけている決定的瞬間を撮るということを保育の中に置きなおして考えてみたらどういふことになるだろうかと思っています。

また私は人との出会いの中で「いま・ここ」を大切にしたいと努めていながらなかなかそこに徹し切れない自分を感じています。が、数うてばあたる式で子どもと接するよりも子どもとの出会いの中でひとつ決定的な瞬間の出会いを心がけて見たいと思います。

「あの時のこと」、「このこと」を何時言おうかと過ぎ去っていく時間の流れの中で考えているうちに言うチャンスが失って終っていたりして子どもに即くことができないことや、早手廻しに動きすぎて子どもが廻り道や時間かせぎをしていると能率的、効率的、計画的にならないとあせってみたりすることが多い保育の中で保育者やおとなが「いま・ここ」に生きる生き方を心がけて見たいものです。

(洗足学園短大)

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十七）

海老沢 敏

十一、日本人の歌として（承前）

伊沢修二が〈示明〉している事例は、《椿》、《胡蝶》、《鼠》の三曲の唱歌である。〈椿ヤ椿、椿ノ花カ開イタ、〉^{ツツヤツツ}《蝶々蝶々、菜ノ葉ニ止レ、》^{テフツテフ}〈矢ヲ取ロ矢ヲ取ロ大矢ヲ取ロヨ〉といった歌詞で始められる三曲中、とりわけ名高いのは第二曲《胡蝶》であろう。この曲は後年《小学唱歌集 初編》の第十七曲として、小学唱歌としても位置づけられるからである。遠藤宏著の《明治音楽史考》の第四編〈唱歌篇〉第四章〈歌曲の戸籍〉には「日本（この歌が入って来たのは実に早く、《ボートの歌》 The boat song

“Lightly row! Lightly row! o'er the glassy waves we go”）であって、明治七年伊澤修二先生が愛知師範学校長であった時、教師野村秋足に作詞させ、小学校で歌はせたと先生の思出の記（同聲会雑誌）^(注5)に見える」

（注5） 同書二〇八ページ—二〇九ページ。

伊沢修二が愛知師範学校長に任命され、その仕事を遂行しながら、一方ではその「師範学校の付属機関として幼稚園風のもの^(注6)を設け」て、ここで唱歌や遊戯を教えることをはじめたことから、この《胡蝶》などの《遊戯歌》が生み出されたものであったが、そのような発想を導いたものはいったいなんであったろうか。伊沢修二に関するいくつかの文献には、次のような記述が見出され

るのである。「先生は〔中略〕工部省に出仕したとは云へ、教育の方にも充分心残りがあつた。加之中学幹事在動中に、文部省お雇教師フルベッキが贈つて呉れた、ゼ・チャイルドといふ書物は、最も先生の興感を惹いたのである。」^(注7)「たまたま雪投げ事件が紛糾して謹慎中の伊沢のもとへ、南校時代の教師フルベッキから、『児童論』^(注8)という本が贈られてきたので、これに目を通していた。フリーベル Froebel 流の幼稚園に関する内容の本であつたというが、伊沢は以来ひそかに西洋の教育思想にも興味を寄せるようになっていた。」^(注9)

(注6) 上沼八郎著、上掲書五二二ページ。

(注7) 故伊澤先生記念事業会編纂委員編纂《栗石伊澤修二先生》故伊澤先生記念事業会発行》二四ページ。

(注8) 上沼八郎著、同右書四八八ページ。

《ゼ・チャイルド》あるいは《児童論》^{ゼ・チャイルド}とはいいたい誰れの著書であろうか。上沼氏の記述からヘフリーベル流の幼稚園に関する内容の本と推察されるが、伊沢自身の証言へ今吾輩西洋ニ於テ著名ナル教育士フリーベル氏其他ノ論説ニ従ヒ^(注9)からも、この著書はおそらくマティルダ・H・クリーゲ著《児童——その本性と諸関連》^(注9)と考えられる。この書は副題からもヘフリーベルの教育原理の説明であり、かつヘマーレンホルツ・ビュローウ男爵

夫人のドイツ語〔著書〕からの自由な翻譯であることが知られる。事実、クリーゲによる序文を読み進めていくと、この本が、マーレンホルツ・ビュローウ夫人の著書《児童とその本質》^(注9)の自由な翻譯と説明されているのである。

(注9) 《The Child, Its Nature and Relations; An Elucidation of Froebel's Principles of Education. By Mathilde H. Kriege. A Free Rendering of the German of the Baroness Mahrenholz-Bulow. 2nd Edition. New York: E. Steiger, 1872》

ここで、このマーレンホルツ・ビュローウ夫人およびクリーゲ夫人のフリーベル文献について、またその伊沢修二への影響関係については論じることが割愛せざるをえないがこの書の再版が刊行された一八七二年（明治五年）には、すでに前章で紹介したアイドルフ・ドゥーアイの《キンダーガルテン》の第四版が、ニューヨークのE・シュタイガーなる同じ出版社から刊行されていることが注目されるのである。クリーゲの《児童——その本性と諸関連》の第六章と第七章はヘフリーベルの《母の愛撫の歌》の説明に費やされ、フリーベルの教育思想の中で、母親が歌う単純な歌が子供たちの魂のもっとも偉大な教育者であると捉えられているとの指摘がおこなわれている。一方、ドゥーアイの《キンダーガルテン》には、《ルソーの夢》こそ収められてはいないが、《胡

蝶スノック・ボリンゲンの原曲が《雪合戦》の名で、音楽、歌の実例中、《心の練習》の第七曲として掲げられているのである。(注10)

(注10) Adolf Donai 《The Kindergarten》4th Edition, New York, 1872, 四五ページ。

伊沢がどこから《胡蝶》の原曲を抜き出してきたかは不明であるが、ここで重要なことは、明治七年（一八七四年）という時点で、彼がすでにフレーベルの《キンダーガルテン》の思想と運動を知っていたことであろう。しかもそれがフレーベルの原典、すなわちドイツ語のオリジナルなものでなく、アメリカのキンダーガルテンのものであり、したがって、伊沢修二はイギリスやアメリカの《キンダーガルテンリーダー》のひとつとしての《ルソ一の夢》をたとえじっさいにはこの時点で知っていなかったとしても、こうした《遊戯歌》、《唱歌遊戯》としての《ルソ一の夢》の間近に近づいていたことだけは確実なのである。

伊沢修二は、すでに述べたように、デイヴィッド・マリーの推薦を受けて、アメリカに留学を果すことになるが、それは明治八年のことであった。これも前に触れたように最初の幼稚園の創立は翌明治九年であった。西暦一八七五年と七六年にあたるこの時期には、アメリカ、それもニュー・ヨークやボストンを中心として、キンダーガルテン関係の文献が次々と出版されており、《唱

歌遊戯》に深い関心を抱いていた伊沢修二は、そうした実践の現場である米国で直接こうした文献に触れることになるだろう。また、それと平行して、これらの文献類が陸統と日本へと輸入されてくるのである。現在国会図書館が所蔵するこの種の文献、すなわち、ドウアイ、ホリス・マン夫人とエリザベス・P・ビーボディの著書などは、《明治十年三月文部省交付》と捺印されている。これらの文献は、明治四年に設置された文部省が海外文献の網羅的な蒐集をも目指して設立した《教育博物館》のコレクションを形づくっていた。第十章で紹介したロンゲ夫妻の《英語キンダーガルテン実用案内書》の第十版（一八七七年）も、この《教育博物館》に所蔵されていたものである。

ところが、このロンゲ夫妻の著書は、明治十年前後によく幼稚園教育に力を注ぎはじめた文部省から翻行刊行が試みられているのである。それは桑田親五訳《幼稚園きょうねんぐわん》（全三巻）である。巻上が明治九年一月、巻中が明治十年七月、巻下が明治十一年六月に文部省から出されたこの《幼稚園》の《巻下》の二五ページから二六ページにかけては次のような歌が掲げられている。

第三 楽キ景色ノ歌

小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其楽キ如何ゾヤ其苦辛トナルモノト
相互ニ之ヲ為サズ」嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其愛シキ

如何ゾヤ

彼等決シテ怒ヲ發セズ決シテ約束ヲ違_ズ決シテ薄情ノ色ヲ顯
サズ雙眉愛情ヲ帶フ○嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其愛_シシ
キ如何ゾヤ

彼等心意ヲ同ウシ丁寧懇篤哀憐ノ情アリ好テ他人ヲ寬恕シ衆人
ノ幸ヲ為ス○嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其愛_シシキ如何ゾ
ヤ彼等家ニ在リ學校ニ在リ遊戲ニ在ルモ愉快歡樂シテ常ニ人間
ノ快樂社会ノ平和ヲ増サントス○嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見
ル其歎如何ゾヤ

彼等若シ互ニ相注意シ互ニ其勞ヲ負ハ、世間速ニ睦シキ一家ノ
如クナラン」嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其歎如何ゾヤ」

これこそロンゲ夫妻の《英語キンダーガルテン実用案内書》の
終章に収められた《準備の歌》の第二曲、すなわち《楽しい眺_ミめ》
の五節からなる歌詞にほかならない。すなわち《ルソーの
夢》の旋律につけられたテキストなのである。この《幼稚園_{をふたごのこども}》で
は譜例はつけられていない。しかしながらロンゲ夫妻のこの書物
からの翻訳紹介であることから、《キンダーガルテンリート》と
しての《ルソーの夢》が原書では明治九年以前に、そしてこう
した翻訳のかたちでは明治十一年六月に、日本に導入され、ある
いは紹介されたという事実が確認されるのだ。《ルソーの夢》、す

なわち《むすんでひらいて》の旋律は、こうして、小学唱歌《見
わたせば》として、《小学唱歌集初編》の第十三曲として、すな
わち唱歌教育の教材として、公式に公教育としての音楽教育の中
で位置づけられるに先立って、私たちの国日本において、《遊戲
歌》、《唱歌遊戲》導入の試みの中で、はやくもその姿を現わして
いるのである。

それでは《ルソーの夢》が、日本に紹介されたのは、この《キ
ンダーガルテンリート》としての《美しい眺め》、すなわち《楽
き景色ノ歌》のかたちが最初なのであるうか。ここで私たちは
《ルソーの夢》の伝播普及のもうひとつのかたち、もうひとつの
ルートについて、もう一度振り返ってみる必要があるだろう。す
なわち《讚美歌としての《ルソーの夢》》、換言すれば《グリーン
ヴィル》と呼ばれた讚美歌の旋律としての《ルソーの夢》の系統
である。

十九世紀の英国において、《ルソーの夢》が讚美歌の節、旋律
として採用され、いくつかの讚美の歌詞にアダプトされてひろく
歌われていったこと、その過程で、ポピュラーな讚美歌の節とし
て、他の旋律と同様、都市の名前が冠せられ、《グリーンヴィル》
と通称されたこと、英国という領界を越えて、米国の他の国々
に伝えられていったことについてはすでにくわしく説明した。こ

うした讃美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》が、日本にも伝えられることになるのはむしろ当然のことである。プロテスタント讃美歌がわが国で初めて歌われたのは明治に入ってからではなく、十七世紀中葉に長崎港内の出島においてオランダ語によるカルヴァン派の詩篇歌であったといわれるが、それはさて置くとしても、いわゆる英語讃美歌が非公式ながら明治以前にはじまったプロテスタントの宣教活動（安政六年＝一八五九年）とともに移入されたことは容易に想像される。しかしながら、日本語によって歌われるプロテスタント讃美歌の最初の記録は明治五年（一八七二年）である。^(注11)

（注11）《覆刻明治初期讃美歌》（新教出版社）解説所載、原恵
《日本の讃美歌史》（同解説七ページ）

日本語による讃美歌創造の努力が出版というかたちで実を結んだのは、明治六年（一八七三年）から翌明治七年（一八七四年）といわれている。最近新聞紙上で話題となった明治六年版の讃美歌集の問題は、本稿には直接の関係がないので、ここでの言及は差し控えたいが、明治七年には、合計七種の日本語讃美歌集が出版されたことから顧みて、この明治七年こそ、日本の讃美歌史上、最初のきわめて重要な記念すべき年であったというべきであろう。^(注12)

（注12）これら八種の讃美歌集は神戸女学院図書館へオルチン文庫に所蔵されており、（注11）に挙げた《覆刻「明治初期讃美歌」》（新教出版社）ですべて翻刻されている。

これらの讃美歌集にはいずれも曲譜がついていない。そればかりでなく、曲名の指示もないものがほとんどである。その中でプロテスタント系の教会が日本で最初に刊行した讃美歌集《聖書之抄書》なる鉛活字本が目につく。^(注13)七種の讃美歌中唯一の鉛活字本であるとともに一五・〇×二一・一の小型で縦型のこの書は、ローマ字と日本語が並記してある点でも特徴があり、唯一の洋綴本でもあって、二四ページの第一部は十戒やニカイア信条、主の祈り、詩篇などが収められ、つづく五六ページに讃美歌二七曲が印刷されている。この讃美歌を伴う文献は、横浜のバプテスト派宣教師ネーサン・ブラウン（一八〇七—一八八六）が編集したもので、明治六年（一八七三年）に來日、同年三月に横浜第一浸社教会（現日本バプテスト同盟の日本バプテスト横浜教会）の設立に際して牧師に就任したこの人物は、米国北部バプテスト教会の日本伝道の礎を据えた存在と評価されている。^(注14)

（注13）《Scripture Manual. SEICONO NUKIGAKI. 聖書之抄書》きりすとの降世千八百七十四年 YOKOHAMA: Printed by Wm. P. Brown, 1874. ちなみに印刷者ウィリアム・P・

ブラウンはネーサンの息。

(注14) 《覆刻解題——明治初期讀美歌一二冊の内容とその特色——》(《明治初期讀美歌解説》七一ページ)。

この《聖之書抄書》の大きな特徴のひとつは、第二部に収められた二七曲の讚美歌の曲名を示している点であろう。同じ明治七年に刊行された他の六集の讚美歌集にみられないこの特徴によって、私たちはこの二七曲の第四曲に《Greenville》という本稿の中心となっている曲名を見出すことができるのだ。

「DAI CI (Greenville)」

第四 キミノ ミチビキ

アマエホワシユノシユヤ オホノベニサマヨフ
ワレタビバトトラバ ミチビキタスケヨ
アクマデテンノパンラ サツケタマヘヨ

③

カハカヌイヅミラ イワヨリナガシ
晝クモヨル火ノ ハシララシメシ
カドヤキユカセヨ ワガフムミチニ

④

ハテントキヨルダンノ カハベニユキデ
オソレヌコミロラ ワレニコミイレ

カナンギシヲブナンニ ワタラセタマヘ

《覆刻解題》はその《追記》で、ネーサン・ブラウンの書簡(一八七四年十二月二(三)?)日は《の記述によって、この《聖書之抄書》が従来一八七四年(明治七年)十一月に刊行されたとする通説がくずれ、(早くても同年末、あるいは翌一八七五年初である)可能性を示唆している。しかし、いずれにせよ、この《聖書之抄書》の存在によって、日本語讀美歌としての《グリーンヴィル》、すなわち《ルソーの夢》が、《遊戯歌》、あるいはヘキンダーガルテンリート》としての登場に先立って、日本でその姿を示しはじめたことを、私たちは知ることができるのである。

《グリーンヴィル》は、さらに明治九年に東京で刊行された肉筆木版本の《改正讚美歌》にも収められている。《改正讚美歌》は日本基督一致教会系の讚美歌集であるが、ここでは《グリーンヴィル》は、第十八《あきみのきみなる》、第十九《あれのにまよえる》、および第三十五《耶穌^{イエス}きみのほかに》の三つの歌詞で歌われるのである。

第十八 8.7.4 Greenville

一あきみのきみなる エホバのかみよ
あれのにまよへる われたびとぞ
マナのごと天^{あめ}乃 かてをふらせよ

二かはかぬいづみの　ながれをしたひ

たちつよくもを　はしらとたのみ

みちびくひかりと　ともにゆかまし

三みなもろともにや　ヨルダンのかはを

わたりておそれず　ケオンのくにへと

ゆくべきみちをば　われにをしへよ」

「第十九 8.7.4 Greenville

一あれのにまよへる　われをたすけよ

われはよわけれど　エホバはつよし

あめの食をもて　われをやしなへ

二つきやぬいのちの　みなもとひらき

くものみはしらや　火のはしらをバ

わがさきにたて　われをみちびけ

三おそることなく　ヨルダンのかはを

わたりてカナンにと　つかしめたまへ

かぎりなくそこに　エホバをあがめん」

「第三十五 8.7. Greenville

一耶蘇^{イエス}きみのほかに　たすけはあらず

そのいつくしみも　よにたぐひなし

われをたすくるもの　あらざるときに

イエスわれのために　十字架^{ちよじか}に死^しせり

二よにいませしとき　わずらふものを

いやせしごとくに　いままなほたすく

イエスのめぐみをバ　われハわすれじ

わがちゝはわれを　きよめたまへり」

さらに明治十年に長崎で刊行されたメソジスト教会系の『讃美歌一』もその第三十八がこの『グリーンヴィル』である。アメリカのメソジスト派宣教師ジョン・C・デイヴィスン（一八四三—

一九二八）は明治六年（一八七三年）に来日し、長崎を本拠として伝道活動を展開した人である。この歌集の歌詞ヘミかみのちからハ　いとかがりなくは別のものである。明治十二年に刊行の『組合教会讃美歌《さんびのうた》はW・W・カーティスの編で五六曲の歌を収録しているが、その第三十三もおなじく『グリーンヴィル』の旋律によつて歌われ、歌詞は『改正讃美歌』の第十八と同じ歌詞をとっている。こうして『グリーンヴィル』は、『小学唱歌集 初編』の刊行に先立って、プロテスタント教会では、讃美歌のひとつとして重用されていくのであった。また、そのような事情は『見たたせば』としてこの旋律が別の姿で立ち現われても変りなく、さらにもてはやされていくことになるのだ。

（つづく）（国立音楽大学）

私の保育



船津和子

今年の四月、昨年度に引きつぎ年長児三十六名を受け持つて、はや六カ月が過ぎようとしている。この子どもたちを受け持つ事が決まった時、私自身の課題として『子どもに振り回される私でいたい』『子どもたちひとりひとりがもつ秘めた宝を少しでも多く見つけたい』との願いをもつてスタートした。そして、この六カ月間に子どもたちの秘密の箱から、少しずつすばらしい宝物をみせてもらっている。その中からいくつかをここに記してみたい。

一学期はとにかく『ひとりひとりにまかせる生活をしよう』

う』という事で、ひとりひとりが遊びに没頭し力を出し切るために、できる限り自由遊びを増やしその中で子どもひとりひとりとかわっていくようにした。

実際の保育がはじまってみると、つながっていた糸が全部切れたように三十六名が三十六の方向へつばしつていった。願ってはいいたものの自分との戦い。一瞬でも遊び込んだ満足感もてるようにとの切なる願いをもったり、見守ったり。

あるお天気の良い日、近くの広場遊びに行った。が帰

る時に三名足りないのに気づき、あわててあたりを捜し回ったところ、土手で拾ったカップヌードルの入れものを手に我がクラスの大將三名が、あまりきれいとは言えない川に向かってかけおりにいく。「どこ行くの——」と声をかけると「ちょっとのど乾いたから水飲んでくる——」との返事、あーなんと返事をしてよいやら、うれしいやら、悲しいやら、行かせてみようか？ まかせる事とは自分との戦いなり、が実感。

一学期後半、ほんの少し遊びにじっくり取りくむ姿もみられるようになった頃、あまり他の者のかかわりをもたずひとり遊びが主であったI、M、F、H男の四人が、ケーブルカーづくりをはじめた。ケーブルカーはトイレットペーパーの芯を二つ合わせ、長い筒をつくり、穴をあけ、ひもを通して半日ばかりで完成。その後イスから床にひもをわたし、ケーブルカーが落ちてゆく角度とひもの長さを何べんもやり直していく。そして遂にロッカーの上にあがり壁から床の真中にひもをわたす。この頃ケーブルカーの中に加速度を増すためにビー玉を入れはじめた。すると穴か

らビー玉がとび出てうまくいかない。私は、せっかいい遊びをしているのだから、ここで助言をした方がよいのでは、などと考えて「ビー玉を底にはりつけたらいいのではないかしら」と声をかけると、いつもおとなしいI、H男がものすごい顔をして「だめだよ。箱の中で上から下へおちてくるからそれでスピードが出るのだから……」と、それからしばらくして、ビー玉を入れる穴に蓋がされスピードも増し、すてきなケーブルカーができあがった。床にはられたひもも、セロテープ、ガムテープと変わり、イスの足に結える事で落ち着いた。

ケーブルカーの遊びがはじまってから三日間、試行錯誤し、失敗をくり返し、ブツかり合い、遂にやりとげた彼らの顔は三日前の顔とは違って自信に満ちていた。又、私はという見当はずれな助言をしつつ、只部屋の真中にはられたケーブルの邪魔にならぬよう部屋の設置をし見守っているだけだった。そして私も失敗しながらじっくり子どもの活動を見つめる大切さを知った。

二学期始業式当日、夏休みを終え喜んで登園する子ども

たちの元気な顔の中で一人A子が寂しそくにやっけてきて「先生、私、今日幼稚園に来たくなかった。ランランが死んじゃったでしょ。私、動物園へ行きたかったの」と、この事を皆が集まった時、子どもたちに話すと、口々に「私も、僕も」と、一人が「手紙出そう」と提案、「いやだ、本当に行きたいよ」「じゃあどうやって行く」「ダンボールの中に入って行けばいいんだよ」G男は両手をいっぱい広げて「これくらいあればさ、皆が入っていけるよ」「でも真暗でこわいわ」「懐中電燈もって行けばいいよ」「息ができないよ」「穴あけてさ、ストローでフーフーやって息すればいいよ」「お腹がすくといけないからお母さんにおにぎりつくってもらう」等々と口々に発言。その間私は何も言わず首を右、左と回してただけ。それからすぐ、ダンボールを持ってきて中に入ったり穴をあけたりする作業がはじまった。

翌日、I男が本当に困ったという顔をして「郵便局までどうやって行ったらいいかな——、先生ひとりじゃ押して行けないよね」しばらく子どもたちも真剣に考えて、「いい考えた。ダンボールに穴あけて足出して歩いて郵便局に行けばさ、先生も一緒にランランのところへ行けるよね」

全員手をたいて「そうしようそうしよう」私も夢中になって、どうしたらこの夢をかなえてあげられるかしら、郵便局の方にお願ひすれば、何とかして行かせてやりたい、と私の頭の中はいろいろな思いが右往左往、この時の子どもたちに郵便についての話をしても何にもならない気がして……。

数日後、子どもたちと私は、ランランとカンカンへのお手紙をポストに出しに行ったのです。ひとりひとりが一生懸命、考え行動したのにこんなに一般的な方法でしか子どもたちの気持をあらわしてやれない自分の力の足りなさをかみしめながら……又こんなにも成長した子どもたちをうれしく思いながら……

おへやにおいてある大きなダンボールをきっかけに発泡スチロール、つみ木、机と組み合わせさせて売り買いごっこがはじまった。お金をつくる者、買い物をする者、輪っなぎや花かざりでお店を飾る者も出てきた。まま、ごコーナーではせつせとお料理をつくりお店の人に食べさせている。お店も次々に増え、あつという間にクラス全体の活動

に広がっていった。三十六名が自分のなりたいたものになりきって遊び、家へ帰りがたぬほど、又、入れかわり立ちかわりいろいろ変化しつつこの活動が十日ほどつづいた。

その後、敬老の会をどのようにするかについてクラスで話し合う機会をもった。「月曜九時十五分からゆり組で秘密会議を開きますから遅れないように来ましよう」と約束、約束どおり月曜日へやを閉め切って秘密会議が開始された。「どうやっておじいさんやおばあさんを迎える？」の問いかけに「天井からきれいな飾りをつけてパーティムたいにしてびっくりさせる」「おみせ屋をする」と意見が出る。

そこでどのようにするか具体的に話し合う。飾りは輪つなぎとお花の形に切った折り紙をつなげたもの。お店はおばあさんたちが必要なもの。好きなお店という事で候補として薬屋、花屋、写真屋、あめ屋、ジュース屋がある。

「じゃあ、これどうやってする？ みんなで全部する？」と聞くとS男が立ち上がって「やりたいやつがやりたいのをやればいいんだよ」と、そこで各々やりたいものに分別材料を用意しグループごとに製作が開始された。

飾りがほぼできあがったところで、今度は天井につける

ためにはどうするかという事になる。「イスを重ねて台にしよう」「オルガンの上にイスをのせよう」と意見がでるたびに実際やってみるがいずれも失敗、するといつもあまり発言しないM男が「はしがいい」と提案しさっそく皆で脚立を使って、へやの真中に飾りつける。(皆が製作に取り組んでいる間に脚立をもってきておこうか迷ったが、用意しないでおいてよかったと、ほっと胸をなでおろした)。飾りを取りつけるもの、のり、画びょう、セロテープとためされガムテープを使うとはがれずよくつく事を発見した。やっと天井に取りつけると、今度は左右がバラバラになっている事に気づき、左右が平均して形よく飾るためにはどうすればよいかを何度もしていこうと、長い輪つなぎを二つに重ね、折り目がついたところが真中である事がわかる。

このようにして多くの時間を使ったがひとりひとりが確実にいろいろな学びをしつつ準備がなされた。当日おばあさまたちは子どもたちが作ったバックを手に買い物を楽しまれ、写真屋さんで記念写真を撮り……とわずかな時間ではあったが楽しい時をもつことができた。

これら一連の活動を通して、クラスのまとまりとか、集

団の役割とか、グループ活動とかいわれるものが、ひとりひとりが意欲をもち全身でぶつかっていくとき、子どもたちの内側から創り出されてくるものである事、現在、いわゆる当番活動、グループ活動というものを私のクラスでは取り入れていないが、ひとりひとりの子どもが時に応じ、場に応じて必要を気づき行なう時、本当の意味での集団が成り立っていくことを見せられた思いがする。この活動が行なわれている間私は子どもと共に考え、驚き、感激の連続であった。又、子どもの本来持つ力、エネルギー、そして心を開き出すと大波のように寄せてくる彼ら自身に、自身の足りなさの故に全部を受けとめてやれないもどかしさを感じた。

『こうしなさいと教えることは簡単だが、長い目標に対して、非常に寄り道と見える。むだと思える努力をさせながら幼児期を過ごしていく、それが意欲につながるのではないかと考えるわけです』と書かれてあった本を読んだことがある。まだまだ足りないところだらけだが、少しこれらを体験する事ができた。そしてこれからも寄り道をしていく保育がしたいと心から願っている。

一学期は一日中興奮して遊びが手につかず今まで身につけていたと思われる生活習慣、集団生活のルールまでみだれ、テンデンバラバラ。反面「こうしなさい」と指示しルールを引いてあげると何も言わずに従ってくるという子どもから、少しずつ変化し、自分の生活を自分で創り出しはじめている。四月から彼らと共にいる私も、今までの経験の中から得られなかった最も素晴らしい彼らの宝を見せてもらっている。聖書の中に『天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい。そしてこれを買うのである』とある。今、子どもたちは最も大切な高価な真珠を手に入れた。今、子どもたちと共にこの年、この真珠を手に入れたいと願っている。そしてこの高価な真珠を手に入れるためにも、神さまが私のような者も許し愛して下さっているように、私も子どもひとりひとりを愛する事ができるよう、ありのままを受け入れる事ができるようにと祈らずにはいられない思いがする。

(神奈川・関東学院野庭幼稚園)

私の幼児教育論（二）

——保育実践に対する研究のかかわり——



小川 博 久

実業としての保育実践と虚業としての研究

（前号からのつづき）

前号において私は保育実践に対する研究のかかわりを明らかにするために、実業と虚業という概念を導入して両者の区別を論じた。そのさい、右の二つの概念による区別の基準を両者の言語活動の性質においた。保育実践における言語活動は保育者と幼児によって生みだされる場に規定される。他方、研究の主要な言語活動である論文作成は、そうした場の規定がない。書き手は自己の自由な裁量によって文章を作る。ただし、その自由は文脈の決定に関してであって、文の構成や語彙の選択に関してはない。書

き手は作文過程で読者の直接のフィードバックを期待できない。だから、文の構成に関しては構文論的基準（テニヲハが正確に使われ、文と文のつながりが的確であること）に、語彙の選択に関しては、意味論的基準（使われている語彙がなにをさし示しているか、なにを含意しているかが相手にわかること）に従うことで、読者に理解可能な伝達内容を構成しなければならない。その意味で、文章を書くということは、つくることであって、それは一種のフィクション構成であるとのべた。今回は、研究の虚業性との対比において、保育実践の実業性について詳しくのべ、両者の対比の上に、研究と実践のかかわりのあるべき姿を検討したい。そしてここで結論としてのべることは、研究者も保育者も研究と実

実践の相違性を理解した上、その双方を自己の存立の必要条件として保持すること、また研究者が保育者と対話するときには、双方の主要な言語活動の特色から生ずる両者の対話のしかたの傾きをお互いに理解し、特に研究者は、保育者の保育についての語り方を研究におけることばに翻訳することが必要であるということである。

既にのべたように、保育実践における言語活動は保育者と幼児によって生みだされる場に規定される。これに対し、次のように主張する人があるだろう。場の規定について、保育者と幼児を同等に扱うのは適切ではない。そこで主導権をもつべきなのは、保育者であって幼児ではない。なぜなら、そこが教育の場である以上、それに責任をもつのは保育者だからである。この主張は場を巨視的な立場でとらえるならば原則として正しい。しかし、一つ一つの対話の場を問題にするならば右のような議論はできない。なぜなら、幼児の言語活動の場を尊重することなしには、保育者との対話の場をつくるきっかけが生まれないことも多いからである。研究者が論文を書くときに、自分の裁量だけで伝達内容の文脈を決めるわけにはいかないのである。いいかえれば、保育者は幼児と対話するとき、幼児の発話内容、表情、身振り、声の調子、発話の際の周囲の状況などを的確に把握する必要

があるのである。

もちろん、幼児との対話においても、文章構成上の必要条件が同様に求められることもある。つまり、先にのべた構文論的基準、意味論的基準、さらに語用論的基準（発話内容が伝達目的に合致しているかどうか）に合った発話が相互におこなわれているかどうかは重要なことである。特に幼児との対話では、正しい日本語が使えるよう教育するという教育的配慮からこのことが要請される。

しかし、多くの場合、右の条件が満たされない発話でも、両者の言語活動の場が共通であれば、意味の伝達は十分可能である。長い間連れ添った夫婦、恋人同志、お互いを知りつくしている友人同志などの会話では、身振り、表情一つで、時には沈黙さえ、意志の伝達を可能にする。経験ある「優れた保育者」は、幼児との間で同様な伝達を行うことができる。たとえば、「B子ちゃん、ほら、あのこと、ね」「うん、先生、とってもおもしろかった」などと、第三者にわからない話をする。この場合、保育者は幼児との間に対話の場をつくっているのである。むしろ、こうした対話がつねに保育上、適切な会話だとはいいい切れない。しかし、こうした場の了解が保育者になれば、幼児一人一人の要求に合った保育をすることはできないだろう。特に、保育における

保育者の言語活動は、大学での講義などより、非言語的コミュニケーションに依存する度合いが高い。その意味で場に拘束される度合いも高いといえる。いいかえると、保育者と幼児の間の空間的距離、位置関係（例、高低）、身振り、表情などによって伝達内容や方向が強く規定されやすい。たとえば、幼児の肩に手を置いていう「さようなら」と、十メートル離れている「さようなら」では伝達内容が変わってくる。特に年少の保育などでは、十メートル離れている「さようなら」は意味がなくなることさえある。

だから真剣に保育に取り組む保育者が最初にぶつかる大きな壁は、幼児の言語活動の場を了解し、いかにして対話の場をつくるかであろう。幼児が熱中している活動に介入する必要があるとき、いつどのようにに参加するか、幼児からの訴えや、幼児同志の争いの場面にぶつかったとき、保育者はどうかかわるか。初心者にはとても困難な課題である。経験のある「優れた保育者」の場合、言語で交信する以前に、幼児との距離のとり方、身体接触、身ぶり、表情などで、幼児との対話を成立させる条件を、つまり場を用意してしまうことが多い。しかし、新米の保育者はその条件を用意しないまま、言語の上だけで対話を成功させようとする傾向がある。幼児との対話においては、時に発話内容よりも、そうした場をつくることの方が望ましい場合がある。

二年ほど前、ある幼稚園の五歳児クラスを見学していたとき、その中に、「自閉的傾向」のある幼児がいた。かれは保育者とも、周囲の幼児とも対話ができないとのことであった。場面はたまたま粘土制作であった。円いテーブルを囲み、十人ほどの幼児が粘土をこねて種々なものをつくっていた。その幼児もその中で同じ活動をしていたのである。かれは、周囲の子どものじやまもせず、熱中して活動していた。その時に私が驚いたのは、かれの作品がとなりの子どもたちの作品と大変類似していたことである。私はかれの作品にオリジナリティがあるかどうかといったこととより、類似したものをつくったことの方が大切だと考えたのである。なぜなら、かれは、こねるという活動を通して周囲の幼児達と対話の場をもっていたと私は解釈したからである。

以上のべてきたように、保育実践において対話の場を了解することの重要性や、その場を了解し、それに参加するにあたって、非言語的伝達手段に訴えることの重要性を強調したのは、そこに保育実践の実業としての特色を見ようとするからである。ということは、右にのべたような事柄についての保育者の能力を現実の保育の場面からとりだして、技術として教えることには限界があるということでもある。むしろこれらの能力は、幼児との生活空間を共有する形で習得される。食事、睡眠、「あそび」などの時

間を共有する機会をもち、その機会を通じて、幼児を抱く、肩に手を置く、視線を合わすというくり返しの中で、その能力は身につくのである。たしかに、この能力は保育という活動に固有のものであるという点で保育の専門性にかかわるものだということができる。しかし、他方、それは、多くの母親が自分の幼児との間で習得していく能力でもある。その意味でそこには、幼児と大人である保育者が生活を媒介にして「つきあう」という日常生活の人間の関係に基本的に共通な部分を見いだすことができる。以上のことから保育実践は日常生活に深く根をおろした活動であり、実業とよぶにふさわしいのである。

研究者は保育者といかに対話するか

これまでのべてきたように、保育実践は実業とよぶにふさわしい活動であり、研究は虚構をつくりあげてを課題とするという意味で虚業とよぶことができた。では、この二つの活動はいかにかわりうるのか。この問いに答えるには、なぜかわかる必要があるのかから考えなければならぬ。

一般に、広い意味での教育（子育てを含む）を第二の生殖作用などという人がいる。この意味は作用の良否にかかわらず、大人

が当然ひきうけなければならない仕事、子どもが必ず通過する過程であるということである。しかもこの仕事は、作用との関係でその結果の良否を問うことができない。良い保育がおこなわれたからといって、その幼児が良くなると結論することはできない。

その逆もまたなり立つ。作用のよしあしを決定することがむずかしいにもかかわらず、だれもがひきうけるべき課題だとしたとき、教育はあたりまえのこととして、問われるべき問題ではなく、行為として処理すべき課題となる。こうした論理は子育てのみならず、意図的教育である幼稚園教育にも延長されやすい。ここでは、ズブの素人でもできる仕事として処理されやすい。活動が日常言語に依拠していることも、こうした論理を強化する。またベテランの保育者といわれる人でも、自分には経験上、十分にできるという確信をもつや否や、努力や反省なしに、自然にできる仕事としてうけとりやすい。このような状況のもとでは、研究とか、ましてや研究者とかいうものは、必要はない。それなしでも、保育をすまうことができる。熟達した漁師に研究や研究者などがいらないのと同じである。実業は虚構を必要としないのである。

もし、研究することが保育者にとって必要になるとすれば、それはどんな場合か。それは保育者が自分の実践について、「こん

なことでもいいのだろうか」、自分の手でどうにもならない幼児を目の前にして「いったいどうすればいいのか」と自問するときである。あたりまえのことがあたりまえでなくなり、保育はするものであるとともに問いかかけの対象になるときである。そしてさらに自分の保育だけではなく広い意味での幼児の教育というものが、人間の形成に決定的に重要な意義をもつかもしれないという認識へと発展したとき、保育者にとって研究は自分にとって欠くべからざるものになる可能性がでてくる。保育者は自己の体験を他人の保育と比較したり、日本の保育といった体験ではつかみ切れない問題を考えたりする。この時、保育者は体験を越えて、虚構、つまり「理論」の世界にふみ込んだのである。保育者は自分の体験を越えた問題についてある概念や観念をつくって、(使って)考えざるをえなくなるのである。自分の目の前にいる対話のない幼児にどうすれば、対話が可能になるかと保育者が問うたとする。保育者はその幼児を理解するために、幼児のとる一つ一つの行動のつながりや意味を理解するために、「自閉症」「言語障害」「情緒障害」「反抗期」といった概念を使うのである。これらの概念は実体があってできる概念ではない。現実のある幼児の状況を理解するために研究者がつくりあげた解釈モデルとしての概念なのである。つまり虚構である。実践家はここで保育にとって虚

構理論が自分に必要だと考えるのである。それとともに、その概念やそのシステムとしての理論は、解釈モデルとして幼児の行動を予測しえたり、それへの働きかけを有効にするのに役立つとはじめて評価される。そしてそれを評価するのは研究者であるとともに保育者自身でもある。

このように見てくると、あたりまえのこととして悩みなく保育をする者にとってみれば研究は悩みの種であり研究者は厄病神のようなものである。たえず自己の保育が問われつづけるからである。しかし、また同時に、その問いかかけによってよりよい保育、望ましい人間のあり方を追求しつづける人にとっては、研究は反省の手がかりであり、研究者はそのパイロットになるべきはずのものなのである。

では研究者は保育者にどう語りかけるべきか。研究者は保育者に真理を教授する啓蒙家なのだろうか。二つの理由で否である。一つは保育者自身が研究する者でもあらなければならないからである。教育研究は研究者の専有物ではない。保育者自身の絶えざる保育への反省はすなわち、保育者の研究である。もし真理と称する教条(ドグマ)が保育者に伝えられ、保育者がその教条の単なる信奉者になってしまったら、保育者は自己の保育を反省し、それを問いつづけることを止めるであろう。二つは、保育につい

ての一般命題の中には、保育者の解釈に関係なく成立するような真理はないからである。たとえば、「幼児の活動の自由を尊重せよ」という規範命題が一般に認められたにしても、こうした「原理」「原則」はこのままでは、スローガンにしかなりえず、保育者の実践とはかかわりえない。保育者はこの命題を承認するにしても、どういう条件の中で、幼児にどういうことをさせることが「幼児の活動を自由」にすることになるかを決定しなければならぬ。もしも、研究者が「真理」の啓蒙家であつたら、そうした保育者の解釈過程にかかわりなく、無責任なスローガンを御託託のように唱えるだけに終わってしまうのである。

以上のことからして、研究者は、保育者のもつ保育への問いかけの相設役でありパイロットでなければならぬ。研究者は保育者の実践にとって研究という虚業がなにより必要でいかに必要かを説き、かつ、実践を反省するための有力な思考モデル（考え方のパターン）を提示できなければならない。しかもそれを単なるお題目としてではない、保育者の保育への反省過程に参加し、その反省を生産的にするよう援助できなくてはならない。そのため対話の場を確立するには、研究と保育実践についての前述の比較考察が有効な手がかりになると私は考えている。

つぎの実践例を検討することによってその点を明らかにしよう。

う。その実践例は本吉園子氏の『愛ときびしさの幼児教育』（あすなろ書房）の中の一つである。

ひであきくんは鉄棒に飛びつくこともできない。と、園長先生が「泣きながらでもがんばってやってみよう。きょうはできるまでやりなさい。先生は小さいときにがんばらなかつたから何もできないの」わたしはそのとき、ひであきくんの目からほんとうに涙があふれているのを見て、心の中で「がんばれ！」と叫んだ。それにしても園長先生のやり方は少しきびしすぎはしないだろうか――。

しかし、何回もくり返すうちに、ひであきくんはついにできた。園長先生も、ひであきくんもこの炎天下に真剣そのものであった。

なるほど保育って、こう、いうものか。あらゆる角度からの保育を知らなくてとは、つくづく思うのであった。あるときはやさしく、あるときはきびしく、そこをとり違いないようにやっていくことの重大さを感じ、非常に勉強になった。（傍点引用者）

たしかにこの例は成功したにちがいない。しかし、保育者の反省からは具体的な方針をきくことはできない。「こういうものか」ということの意味はなにか、「あらゆる角度」はどういう角度か「あるときはやさしく」とあるが、どういうときにやさしくするのか、ここからは園長のこの事例に対する指導に感動した保育者の姿が読みとれるだけである。

このように、保育者の幼児理解や保育理解はそこでの対話の場に拘束されている。保育者は直観的にその場がやさしくする場であり、園長の指導が適切であったことを了解する。そしてそれを比喩性の高い言語、主観的な印象として記述するのである。もちろん、この記述を非科学的であるときめつけて排斥すべきではない。しかし、ここでの反省をさらに深める場合には、保育者のこうした印象を追求すべき課題として一般に認識される形に翻訳しなおさなければならぬ。つまり、弱虫であるひであきのパーソナリティは具体的にはどういうものであったか、運動能力はどうか、またその日の行動はどうであったなど、一般にどのような条件のときに幼児にやさしくすることができるのか、どうすればとり違えないですむのか、これらの問いに答えるにはひであき

についても、その時の状況についてもっと具体的客観的データがほしいのである。それに加えて、状況を一般論として考察するためには、抽象度の高いつまり虚構性の高い概念が必要なのである。たとえば、パーソナリティ傾向と賞罰等の刺激条件との関係についてというようにである。それはこの状況をこえて、理論的に問題を考えるということである。研究者の課題は保育者が保育の場でとらえた問題をより一般性の高い問題として考えるようにいざなうことであるとともに、直観的な場の理解を反省する手がかりとすることなのである。

※完※ (東京学芸大学)

※

※

行事の報告

●昨年の十月、運動会や遠足の行事でお忙しい先生方に、各園の工夫を凝らした行事の内容を報告していただきました。行事との取り組み方は、各園の保育のありようを写し出す鏡でもあるようです。

行事の実施の実際と

今後の考え方

大山 晴子

東京・中央区立昭和幼稚園

①行事の内容と方法について

私の勤務園は、小学校と併設であり、園長は小学校長の兼任であること、都心にある児童・園児数が極めて少ないことなどの実態から、運動会、学芸会、展覧会などの

大きな行事は小学校と合同で行なっています。幼小合同で行なう行事では、発達段階差にどう応ずるかが課題となりますが、小学校児童の演技や表現あるいは作品などを見たり聞いたりすることが、幼児の経験や活動の幅を広げるよい刺激となると受けとめ、プラスの面を生かすとり組みを心がけています。

実施に当っては、幼稚園児の立場から無理のないように内容や方法、時間を検討し、十分教育効果がかかるように留意し、小学校とも綿密に連絡をとりあいます。

また、それらの行事で、幼稚園が独自に経験を再現したり発展させたりしたいと考える場合は、日を変えて幼稚園のみで場を設定して実施しています。できるだけ年長児を中心にした幼児の自発的な活動を重んじ、下手でも幼児自身にまかせる部分を多

く作るようにしています。

入園式、修了式、各学期の始・終業式は、生活に区切りを与え、成長への自覚や喜びを味わわせる行事ということで、楽しくなごやかな雰囲気の中にも、けじめのついた規律のある参加の仕方を促すようにしています。

しかし本来の目的から、あくまでも園児主体に考え、園児の発想や意見をできるだけとり入れる形で計画し、実際の場で、子どもが子どもの自然のことばで発言するなどの場を多く組み入れるようにしています。

その他、誕生会、発表を含んだ子ども会など、友だち同志の交流を深めたり、互いの表現を見せ合い発表力を高めたりする活動は、教育活動に支障のないよう、父母の参観は最少限度に絞ります。

園児の自然の姿を尊重するということで、練習は過度にならぬように戒め、ひとりひとりの子どものどの部分に新しい進歩や努力が見られたかに目を向けるようにしています。

ひとつひとつの行事は計画を立てる時と同様に、終わったあとの反省を綿密に行ない、うまくいかなかった点、効果の上った点を記録に残し、次回に生かすよう努めています。

②行事実施上のくふうについて

(遠足を例に)

私の園で特に力を入れているのは遠足です。都心で自然にも、遊び場にも恵まれなない地域の実態から、できるだけ戸外に連れ出す機会を多く作っています。区のスクールバスが年二回配当される他は、貸切バスを使ったり、交通費の負担を軽くするため

行事の報告

に国電や地下鉄利用を進めたり徒歩でゆける公園に出かけたりします。徒歩遠足では足を鍛え、心を鍛えるだけでなく交通安全の実地指導の成果も上げるように配慮しています。

ただ戸外に連れて行き楽しく遊ばせるというのではなく、ねらいをはっきり設定します。

従って事前の目的地の下見に力を入れ、どこで何をどのように体験させるかを教師間でよく話し合い、事前の指導に位置づけて遠足への興味や意欲を高めます。たとえば、虫とり遠足では、それぞれの年齢に合わせて、牛乳パックやティッシュペーパーのあき箱を利用して虫カゴを作らせ、当日携帯させます。

また、いも掘りの遠足では、いもは土の中でどのようなになっているか、教師が幾つ

かの絵を示してあてっこさせ、当日しっかりと見てこようという意識を促します。

このように目的意識をはっきり持たせることにより、子どもたちの自然物を見たり、聞いたり触れたりくらべたりする姿勢が積極的になってきました。

戸外活動の目的は、自然の姿に触れさせることにありますので、季節の移り変わりを具体的に分らせるために、同一の場所に季節を変えて少なくとも年二回は出かけるように留意しています。

③行事への今後のとり組み

年間計画を立てる段階で、昨年の行事を慣例としてとり上げ、月に割当ててしまうことが多く、まだまだひとつひとつの行事の見直しが必要です。この行事で子どもたちに何が育つかを問い、残していくもの、切り捨てるもの、回数をふやす（へらす）

もの、時期を遅らせた方がいいもの、方法を変えた方がいいもの（全体です。学年別にする）など、さまざまな角度からの検討が必要だと思っています。また、子どもたちを主体にして考えた行事でも展開していく過程で、いつの間にか行事に教師も子どもも追いつけられている場合が少なくありません。たとえば、子どもの能力以上のものを期待して、教師が手をかける部分が多くなったり、興味のない子どもを叱咤激励してとり組ませねばならなかったりします。

出来ばえや父母の目を意識した行事のとり組みでなく、子どもが行事で体得するものの方を大切に考えたいと改めて心に言いさせています。そのためには、父母会などの行事を生かして幼児の発達と指導のあり方について正しい理解を促す働きかけが必要だと思っています。

行事を園生活に無理なく結びつけて教育的価値の高い総合的な経験の場となるように指導をくふうしていきたいと考えています。

◇ ◇ ◇

岩本 典子

東京・武蔵野相愛幼稚園

(入園式)

入園する子供達とおうちの方々を新年長児と教師とで迎え入れる形をとっています。式は二十分程度のもので、年長組のお兄さん、お姉さんに手をつないでもらったり、歌を歌ったり、先生とお話したりして帰ります。おいのりを初めて経験するのもこの日です。

生まれて始めて多勢の集団に足を踏み入れる幼な児一人一人に、幼稚園を好きになつて欲しい、幼稚園で自分を思い切り出せ

る人になって欲しい、という願いをこめて、教師はその準備に、又当日の言葉がけに気を配るよう心がけています。

新年長組は二日程前から通園し、新しい小さな友達の入園を気恥ずかしさと誇りが混じり合った心境で待っているようです。ホールのボールドを飾ったりしながら、迎え入れる心構えができていくのように見えますが、自分達が、「憧れの白バツジ(年長組)」になった喜びは非常に強く式の日も興奮気味です。

「入園式は厳格にすべし」との外からの声も強く、入園式とは如何なるものか、教師間でも再検討すると共に、その日七十四名余りの子供達一人一人の心の内に流れた思いをこれから始まる保育の中で大切に育てていきたいと思うのです。

(遠足・園外保育)

遠足は春に一回、秋に一回あります。春はおうちの方と御一緒に広い野原に集まります。特別なプログラムは用意せず、木のぼり、鬼ごっこ、陣とり、縄とび、散策などをそれぞれに親子で存分楽しみます。

広々とした場所、ゆったりとした時間の中でお母様方に多いに自分から遊びを見つけ出して欲しいという願いもこめられています。遊ぶ子供、遊ぶお母さん、遊ぶ教師になれたら嬉しいと思います。

秋は園児達だけの歩き遠足です。片道約四十分歩くと善福寺公園があります。小高い山でズボンを真黒にしながら山滑りを楽しみ、ビニール袋いっぱいに木の実や色づいた葉を集めたりして一日を過ごします。

又、井の頭公園が近いものですから(入口まで徒歩約十五分)子供達のその日の様子を見ては出かけます。二時間ある遊びの

行事の報告

時間の中で、行きたい子供達と出かけることもありますし、クラスでお弁当を持って奥地まで探検に行くこともあります。風を作った子供達は自家製の風をかかえて意気揚々と飛ばしに行きます。雪の降った翌朝は合戦場にもなります。「園外保育」という言葉にとらわれずに気がるに子供の健康状態、保育の状態と相談して出かけられることは大変幸なことです。

四季それぞれ、又天候によっても味わい方が異なり子供達が持ち帰るお土産も様々です。それらがクリスマスの飾りになったり、おなべでゆでられて皆のお腹に入ったり、時には翌日から遊びの仲間に加えられるりしています。

これからも出かける子供達、留守を守る子供達（といっても彼らは広々とした園舎で、思わぬ遊びを繰り広げていきます）と

を無差別に分けてみたり、クラス毎、或いは男女別に分けてみながら、いろいろな経験の中で生まれ育ってくるものを楽しみに待とうと思います。

年長組は年三回、公園をつき抜けた程の所にある教会まで礼拝をしに行くのも大きな喜びの一つです。入園当初は皆の歩調についていくことのむずかしかった障害をもつ子供達も「家から幼稚園まで歩く」という毎日の繰り返しの中で、（お母様の努力、協力も含む）人一倍疲れることも少なくなっているようです。

（運動会 プレイデーと呼んでいます。）

年に二回行ないます。一回は、隣の小学校のグラウンドをお借りして日曜日にお父様も御一緒に競技を楽しみます。競技といってもその場で楽しめるものばかりで、つな引き、かけっこ、玉入れ、おうちのひとの

おんぶ競走程度のものです。その日の為に練習は一切ありませんが、年長組になると遊びの中で、「プレイデーの練習ごっこしようよ」と言い出す子供もいてリレーやつな引きをしてはその日を待ち望んでいます。

もう一回は秋に行なわれます。春の遠足で行った公園に集合して、道具を使わずに自然の中を走り、跳び、転がります。グループを作って地図を見ながらの宝さがしや風船わり、又お昼の休憩を一時間たっぷりとするなどしてプログラムが過密にならないよう心がけます。

（卒園式）

卒園する園児と御父兄が幼稚園にみえます。形式は毎年担任の教師が中心となっております。考えますが、今までは礼拝・修了証授与の後に園児と御父兄と一緒に楽しめる時を設

けました。三学期は月日も短かいうえに、卒園児の組は何やかやと忙しくよほど保育者が心していないと慌しく時が過ぎていきます。私達の願ひは、幼稚園生活残る日々をゆつたりとした環境の中で、存分に遊び切つて卒園していつて欲しいということです。二年間の総決算としてもそれが一番必要であり、又私共が子供達一人一人にしてあげられる最後の保育だと信じています。

◇ ◇ ◇

折原 祥子

神奈川・松ヶ丘幼稚園

入園式

始めての集まりに、どうしても緊張しますので、式というより顔合わせのような形で行ないます。三十五名程の人数ですの
で、後にお母様、前に子供が丸く座ります。

話をする先生は、ぬいぐるみの動物の指人形で話しかけ、子供達と会話しながら進めて行きます。先生の紹介、子供達の知っている歌を歌います。そのまま、各先生が動物の人形を持ち、簡単に劇をします。

動物なのでとても集中して聞いているようです。内容は、「明日から元気にいらっしゃい」という様なものです。

最後に一人ずつ名前を呼んで、園児の作つた首かざりをプレゼントして帰ります。

約四十分で終ります。

遠足

春と秋、年二回行きます。

春は、入園した子供達が園生活に慣れて来る頃、六月上旬に、母親も参加して、自然の中に出掛けます。目的は、自然の中ののびのび遊ぶこと。又母親の親睦をかねています。

場所、歩いて行かれる所が良いのです。が、あいにく適当な所がないので、やむをえずバスを使っていますが、いつも、もっと近い所で良い所は……と考えています。現在はこどもの国（約四十分）と葉山の海岸（約一時間二十分）に一年交替に行っています。

こどもの国では、草や木の自然、又牛などの動物、おもしろい遊具で、葉山では、海の豊かな自然の中で存分遊んで来ます。

全員で八十五名位ですので入口で開散しなくても一緒に行動出来ます。

秋は毎年、多摩動物園に園児とお手伝いのお母様数名で行きます。バスで約一時間二十分子供達の身近な動物に触れ、年齢に合った、とらえ方をして来る様です。園内では、クラス別にコースを考え、昼食は一緒にします。

行事の報告

運動会

十月上旬に、親子で親しめる運動会を致します。プログラムは、その年の子供が興味を持って遊んで来たものの中から考えて作ります。親子でする競技、リレー、ダンス等盛り沢山ですが、午前中で終わります。

親子で参加する競技もあり、又年長児は係等も交替で行ない、皆で力を合わせて行う楽しさを知ります。終りに、園長先生手作りのメダルをいただいて帰るのが習慣になっています。

学芸会

特にしていません。ただし、クリスマスマスの祝会の時、各クラスで何かまとめたものを発表します。劇、合奏、人形劇、紙芝居、ペープサート等、保育の流れの中から自然に出て来る様配慮しますが、年長は、自分達で作りに出して行く様しむけています。

す。

皆の前で発表する事も大切な事だと、感じさせられます。

園外保育

歩いて十五分位の所に、大きな古いお寺があるので散歩に出掛けます。広いグラウンドと裏山を走り回ったり、木の枝や葉、実で遊びます。秋にはどんぐり、ぎんなん、落葉が沢山あります。

おいもほり、梨狩りも近くで散歩がてら出来ますので、秋は盛り沢山になります。

又、年長のみ三月上旬に、バス、電車をのりついで江の島に行きます。水族館、マリンランド、海獣動物園を見学し、海で遊んで来ます。

卒園式

全園児で祝います。緊張した雰囲気なく、楽しい中にも落ついた場になる様心が

けています。手作りのコサージュをつけた卒園生は、一人ずつ園長先生より証書をいただき、握手をしてもどります。園で楽しかった思い出を、年少児と交互に呼びかけ、又歌を歌って終わります。

それぞれの行事が、園側で一方的に計画されたものでなく、子供と一緒に作り出して行く様考えています。

一つ一つの行事に、手作りの暖かさと、出来るだけ手を加えています。

たとえば、誕生会には、先生手作りの和紙で貼り絵をした動くカードをプレゼントします。毎月異なったものが飛び出たり、動いたりするので楽しみにしています。又自分達もカードを作る時、動く様に工夫しているのを見るとおもしろいなと思います。

行事を経験する事は、とても大切な事だ

と思います。日本古来のものに触れたり、

又友達と一緒に一つの事を成しとげる事

は、とても意義のある事と思います。それ

をした時の子供も喜びが大きい様です。

又一つ一つ経験して行く事により、ひと

回りずつ成長していく様にも思います。

ただ、子供の成長の流れに合わせて計画

して行く事が大切で、こちらで計画したも

のに子供を合わせて行くのでは、意味がな

いと思います。

子供の生活の流れにとけ込んだ、終った

後で楽しい良い行事で有意義だったと感じ

る事と思います。

毎日の保育の中にとけ込んだもので、皆

で楽しめる行事にして行きたいと思ってい

ます。

◇ ◇ ◇

早川 美代子

愛知・豊田市立東丘幼稚園

本園の行事のとりあげ方の基本的な方針

は、行事のために生活するのではなく、生

活のために行事を行ない、それが幼児の思

い出となり、成長の足がかりとする。実施

する行事は、大きくわけて、保護者との連

けいの場、四歳・五歳の交流の場、親子の

ふれあいの場となる行事などである。

入園式

入園願書の受付の際、幼児と面接をし

て感じた事、地区別を考慮して、組分けを

してから一日入園を実施する。時期は、三

月上旬、場所は、入園したら、自分の部屋

になる保育室で行なう。入園式にはすでに

組も、下駄箱もわかつているので、安心して入園式に参加できる。

入園式の日程

九・三〇——九・五〇 受付、組の前の

テラスで名札と出席ノートを先生から

受けとる。

一〇・〇〇——一〇・二〇 入園式。外

で、親子手をつないで組旗の前に並ん

で参加

一〇・三〇

写真撮影

一一・〇〇

降園

遠足

春は、バスに乗って、東山動物園、秋は

歩いて近くの弘法山へ行く。(徒歩三十分)

ねらい(秋の遠足)

。横断歩道を正しく渡る。歩道を歩く。

。虫とり、木の実などをひろって秋の自然に親しませる。

。五歳と四歳と手をつないで歩いていく。

行事の報告

日程

- 九・〇〇 用便、持ち物の整理
- 九・二〇 集合 園長話
- 九・三〇 出発
- 一〇・一〇 現地着
- 一一・二〇 弁当を食べる。
- 一三・三〇 園到着

運動会

ねらい

。友だちと一緒に運動をする楽しさを感じさせる。

。友だちと力を合わせて競技やリズムをする
ることによってみんなでやりとげたとい
う満足感を味わわせる。

日程

八・三〇——一二・〇〇

準備

。ほとんど前日に、子どもと一緒に準備し
ておく。

。保護者席は、自由で、各自で席を用意。
。各種目の準備は、職員で行なって片づけ
は五歳児の子どもがする。できないもの
は、先生が手伝う。

内容

四歳

かけっこ(直線)・競技

リズム遊戯・親子ダンス

五歳

クラス対抗リレー(トラック使用)

競技(親子)・親子ダンス・マッスゲ

ム(男) 遊戯(女)

こいのぼり運動会

入園して一カ月過ぎて、四歳・五歳の交
流の場として、五歳中心に、行なう。

四歳・五歳と手をつないでフオークダン

スをしたり、玉いれをする。五歳がするの
を、四歳が見学したりなどする。運動会
後、「ちまき」をたべる。運動場は、手づ
くりのこいのぼりを立てる。

《工夫した点》

。入園式

・親子で手をつないで、子どもに安心感を
持たせる。

・入園式前から組と保育室を知らせておい
て親子とも入園の緊張をやわらげる。

。遠足

・五歳児と四歳児と一緒に歩きながら、交
流を深めるとともに、道路上での危険を
少なくする。

。運動会

・子どもと一緒に準備したり片づけたりす
ること。

・こいのぼり運動会では、予行練習もな

く、各組で行なっている保育を合同で、外で実施

・こいのぼりを作る事によって「こいのぼり運動会」をする意欲をたかめる。

◇

◇

◇

園の行事に関する報告

良知 三恵子

神奈川・横浜学園附属元町幼稚園

◎入園式

園のホールが狭いため、入園式は、新入園児及びその家族で行なっています。内容は、園長・母の会々長の挨拶、年長児代表の子どもの歓迎の言葉と歌、担任及び職員紹介、手あそびなどで、全部で三〇分位の式です。式のあとクラス別に写真撮影をします。入園式の方法は伝統的なものであ

り、これからこうしたいというような考えは特にありません。

◎遠足(春・秋)

春は近くの森林公園(競馬場跡に芝生や様々な木々、草花を植えた緑の公園)に遠足に行きます。春の自然の中で親子が楽しむ、というねらいのもとに、フォークダンスをしたり、親子ゲームをしたり、野原でころげまわったり、虫を採ったり、お弁当を食べたりして、一日を過ごします。動物園見学とか遊園地で遊ぶことなどは、各家庭でいつでもできることです。私たちの園では、たくさんの方が集まらなければ味わうことができない楽しみ方をしようと、心がけています。これからも、春の自然の中で思いきり楽しめるようなゲーム内容などを考えて、より充実させていきたいと思っています。

秋はおいも掘りです。観光バス四台で、

園児と職員及び世話役の母親二十名程で出かけます。このいも掘り遠足も、秋の自然を満喫できるように心がけてプランをたてています。芋畑の近くの神社でお弁当を食べたり、虫採りをしたりしたあと、赤黒くてやわらかい土をごはんしゃもじで掘って、赤いおいもをみつけます。畑が狭い関係で、子どもたちだけで行なっていますが、参加したいという母親の声が多いので、これから考えていきたいと思っています。

◎運動会

今年は、「当日、親子で楽しむ」という大きなねらいのもとに、プログラムを組みました。その内容は同封のプログラムの通りです(プログラムは省略・編集部註)。午前中は、子どもが精一杯遊び、午後は、親子でフォークダンスをしたり、親たちが、か

行事の報告

けっこ・つなひき・クラス対抗リレーなどに参加して、思いきり体を動かします。

三年程までは、子どもが毎日練習を重ねないといけないような、見栄えのよい内容が盛りこまれていました。その頃、親の満足は得られたのですが、子どもの生活は、運動会練習のため、かなり束縛されていました。そこで職員全体で話し合い、二年前から「子どもの生活のリズムをくずさないで、なおかつ親の理解を得られる運動会にしよう」という考えを土台として、内容を吟味しました。

さらに今年は、子ども側の立場をより重視し、子どもの遊びの生活に対する大きな刺激の一つとして、新しい運動的な経験をするチャンスとして、運動会を考えようと話し合い、その考えに基いて内容を検討しました。又、運動会が子どもにとってどの

ような意味を持つのか、ステップになるにしても、どのようなステップになるのか、よくわからないので、運動会前後を通じての子どもの様子を観察し、それを明らかにしていくということを、教師の課題としました。一方、親への保育内容の伝達の手段として、運動会の具体的な子どもの活動を例にとって説明したプリントをあらかじめ配っておきました。又、当日、種目によって、子どもの成長の様子を放送しました。

今後は、今年度の反省事項及び観察結果などを土台として、より望ましい運動会にしていきたいと思います。

◎作品展

毎日の保育の中で作ったものを、ホールに集めて展示し、一日目は親の観覧日、二日目は、子どもが広いスペースの中で思い

きり遊べる日としています。作品展の主旨は二つあります。ひとつは、親に保育内容を理解してもらうということです。昨年は、作品の見方をプリントして親に渡し、会場内にも製作活動を通しての子どもの成長の様子を書いて掲示しました。しかし、完成した作品のみの展示だったので、理解を深めてもらうには、今ひとつアピールする力が弱かったようでした。そこで今年度は、子どもの成長の様子をよりわかりやすく示し、親の保育に対する理解を深めたいと思っています。その手段として、作品のできる過程の写真を示す、年少児の作品を写真で示し、その下に年長児の作品を展示するなどのことを考えています。そして、製作活動の中で子どもが、どんな面を伸ばしているのか、一年間の経験の違いがどういうもののかなどを、親へ伝えたいと思

っています。

作品展の主旨のもうひとつは、子どもに、大きなスペースを利用して、ダイナミックな製作に取り組むチャンスを与えるということです。この作品展をひとつの刺激として、製作活動をより充実させてほしいと願っています。

●園外保育

私の園では、園庭が、コンクリートと人工芝ですので、できるだけ機会をとらえて、園外に子ども連れ出すような心がけています。さいわい、周囲にはいろいろな公園があり、すべて歩いていくことができます。(港の見える丘公園・山下公園・元町公園・麦田公園など) どんぐり拾いをしたり、葉っぱ拾いをしたり、カサカサと音のする枯葉のじゅうたんの上で鬼ごっこをしたり、船をながめながらお弁当を食べたり

します。これからも、園外にたびたび出かけ、園では味わうことのできない楽しさを、十分に味わわせてやりたいと思っています。

●生活発表会(学芸会)

毎年二月の終りに、全園児が参加して、生活発表会という名前で行ないます。年少、年長共に、担任の教師が、子どもの状態を見て、ダンス・舞踊劇・創作劇・楽器演奏などのテーマを、子どもと共に決めます。これらのテーマは、長い時間をかけて、子どもの生活の中に無理なくおろすように心がけていますが、元町幼稚園の伝統としての生活発表会が、かなり見る側にポイントをおいた大々的な発表会のため、見る側の期待が大きく、発表会間近になると、練習を重ねている状態です。当日は園

にある様々な衣装を身につけ、自分たちで作った小道具などを使って、舞台で発表します。発表会が終わった後も、ダンス・劇などの遊びが続いていくことから見て、子どもたちは、この活動を楽しいと感じているようです。今後、子どもの活動の刺激のひとつとして、又、新しい音楽リズム的な経験をするチャンスとして楽しめる内容を吟味し、一步一步、生活発表会という名にふさわしいものにしていきたいと思っています。

●卒園式

同封の式次第の通りに行なっています(式次第は省略・編集部註)。当日、子どもたちは修了証書をひとりひとり園長先生の手から受け取り、握手をします。又、思い出のアルバムという歌の歌詞を、その年の卒業生の印象深かったことがらの内容に変えて

歌います。今後は、幼稚園のしめくくりとして、子どもたちがさらに大きくはばたいていく出発点として、よりふさわしい式にしていきたいと思っています。

◇ ◇ ◇

ミニミニ運動会

小林 暉親

千葉・八千代市親子相談室
一つの大きな行事が終ってホットするのは、皆同じであろう。しかし、行事は楽しいものである。子供達の生き生きとした顔、父兄の笑い声、そして職員のはりきった振舞い……実にいいものである。特に運動会などはその代表であろう。

今年はまだ自分の園以外に八箇所もの運動会を見学する事ができた。幼稚園が

二箇所、保育園が四箇所、幼児教室が二箇所である。これらの園は、私がいる親子教室（発達に障害のある子供達のための母子通園施設で、0～五歳までの三十名定員の施設である）の園児の卒園先や、現在併行保育をしている園であり、それぞれ招待して下さったものである。

八箇所の運動会を見学して気の付いた事は、幼稚園・保育園・幼児教室とそれぞれ特徴があるな——という事であった。それはまず第一に、私立幼稚園の場合、営利が目的という事も半分あるが、三群の中で見ている一番華やかでショー的要素がふんだんにあり、父兄達もそれを喜んでおり、私なども、実に子供達をよくここまで指導（訓練？）したなという感じがしたのである。それに比べ保育園の運動会は、平日に行なったという事で父兄の参加も少なく、

にぎやかさには欠けるが、幼稚園児に比べ、子供達がのびのびと「自分達の運動会だ」という雰囲気で作っていた。又幼児教室の場合は、諸設備・会場等のハンディの中で、父兄達の自主運営という点を生かし、三群の中で一番、親・子・職員が一体となつて、マイペースの運動会を楽しんでいた。

さて、わが親子教室のミニミニ運動会であるが（園児数が少ないのでミニミニとした）幸い雨による順延という事もなく、十月の下旬の平日に、楽しく行なう事ができた。

親子教室の運動会の最大の特徴は、一に、勝ち負けにこだわらず、全く子供達のペースで進行させる事、又運動会の中心は子供だけではなく親子であり、プログラムの半分は親向けである事（何故なら、親子

教室のケースとは、発達に障害のある子供だけをさすのではなく、その子供をかかえた家族を常に一単位一ケースとして考えており、時には子供より、悩みの淵にある親へのケアを重視するからである）があげられる。

次に主催者は誰かという事であるが、これが親子教室ですとはいえないのである。何故かという、一応親子教室の職員は、兼務園長一名、指導員一名、パート職員四名というわけであるが、とてもこれだけの人数では障害児の運動会はできない。そのためいつも関係機関のケースワーカーや言語治療士や保健婦さん達が応援にかけつけてくれ、受付けをしたり、カメラマンになったり、決勝テープ係になったり、子守りをしてくれたりと、皆手伝って（手伝わされて？）くれるのである。このチームワー

クがあつて初めて大きな行事ができるのである（合宿でもクリスマス会でも皆で応援してくれる）。もし皆が自分の仕事の領分だけしっかり守っていてくれたら？ とも親子教室は行事など考えないであろう。いつも感謝している。そんな意味で「主催者は」というと、親子教室応援団？ といえるかもしれない。

又、今年の運動会の最大の成果は、普段時々交流保育をしている幼稚園の五歳児クラス（三十名）が、プログラム後半から参加し雰囲気在大いにもりあげてくれた事である。障害児だけの、特に低年齢児の多い（二歳前後が主）親子教室の場合、子供も楽しめ親も楽しめるプログラムまでは出来るものの、運動会らしいにぎやかさや華やかさは、最初からあきらめていたのであるが、健康な生命力に満ち満ちている子供達

の参加によって、運動会の雰囲気が一気にもりあがり、教室の子供達もつられて大いに頑張ったのである。普段、言葉の少ない、個人遊びが主で、集団性の乏しい保育に慣れすぎてしまっている者達にとって、実に素晴らしい刺激であつた。改めて、正常とは何か、健康とは何か、生命力とは何かを感じさせてくれたのである。又親達にとっても、楽しかったという思い出と共に、健康な子供達のたくましさ、にぎやかさ、力強さと、それらと共存しうる集団規律をみて、大いに得る所があつたようである。

◇ ◇ ◇

行事の報告

運動会

水野 恭子

新潟・上越市立たんぼぼ園

心身障害児母子通園の施設であるたんぼぼ園での運動会を紹介したいと思います。

園には実にいろいろな個性を持つ子があります。坐位がようやくとれるだけとか、

ひどい癇癪もとか、痙攣発作が頻繁だとか、多動だとか、鈍重だとかに加え、DQ

が30・50という知恵遅れが伴う子がほとんどなのです。ですから、種目等の内容を決

めていくにあたって、十分な話し合いがもたれました。そして、

1、母親が夢中になりすぎないように。あくまで子どものペースで参加すること。

2、ハンディに関係なく、同じ条件でできる種目もいれること。

3、母子関係を深めるのに役立つこと。

の三点を基準に計画を立てました。日時は10月9日10・15より。時間については、子どもを指示的に動かせるのはせいぜい一時間

間と思いましたが、実際には中途に十分の休憩をいれて一時間半弱となってしまう

しました。種目のうちのいくつかを取り上げてみます。

1、「入場行進」これについては、毎日、お帰りの集まりの時に行進しますので、

特別な練習は不要でした。しかし、常と違う雰囲気がかかったようで、いつもは

どこかに飛んでいってしまう子まで、きちんと歩きました。

2、「旗とりレース」母親に肩車された子が、柱にとりつけてある旗（これは、白

いビニル風呂敷やスーパリーの袋等を切ったマジックで赤丸を塗り、笹竹につけた

もので、母親達の作品です）をとってく

るレースですが、準備体操後に、子どもを高い所にあげたことは気分を盛り上げるのによかったと思います。

3 「焼きいもゴロゴロ」できる子は一人で、介助の必要な子は助け、恐がる子は

母親が抱いて横転しました。脳性マヒ等の肢体不自由児の訓練項目でもあり、

又、目が回るせいとか、どの子もとても喜びました。

4 「毛布ひき」毛布の上に子どもを乗せて、母親が引いていく競技ですが、その

子の状態に合わせて、引っ張るスピードを加減するようにしました。どの種目にもほとんど関心を示さなかった癇癪もち

の知恵遅れのH君が、これをとても喜んだことが印象的でした。

5 「障害レース」箱抜け、シーツの下く

ぐり、すべり台、平均台、トンネルを次々にこなしていくレースですが、すべり台に上り滑れるようになったばかりのGちゃん、平均台がうまくなかったJ君、四つん這いになってトンネルを潜れるようになったY君など、日々の遊びの中で成果のみられる遊具を使いました。ですから、中にはどれもできない子もいます。でも、母親に介助されて経験することも大切と考えました。

6 「大玉ころがし」 できる限り子どもに押させていくわけですが、母親の介助のしかたを、随分注意しました。方向をとり、その子に適したスピードを保つようにすればよいのですが、母親達には至難のようでした。事前に力を入れて練習したものの一つです。

7 「花笠音頭」 振り付けは保母が考えま

した。ボール紙と御花紙で作った笠を持ち、円陣をくみ、母子共に一生懸命踊りました。一カ月以上も毎日練習しましたが、完全にできるようになったのは21人中2人のみです。でも部分的にはかなり覚えられたようです。何よりも笠を持つことが嬉しかったようで、運動会后、踊らずに一週間過ぎ、何の気なしにこのレコードをかけた所、過半数の子が笠をとりといった程でした。

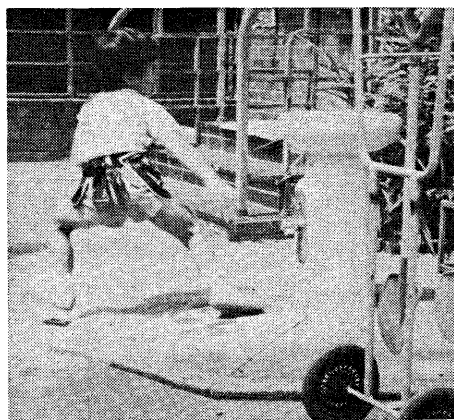
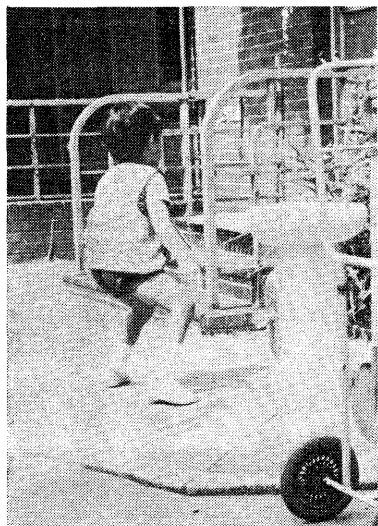
8 「玉入れ」 二チームを左右に分けて待機、玉は中央に散らべます。両陣の出発線の内側に箱を置き、「ドン」にて玉を中央で拾い、自分の陣に戻って箱の中に入れるのです。自分で玉を拾い、自分の陣に戻ってきて箱に入れるという簡単なことですが、練習中には愉快なことが何回ありました。まず母親が手を出して

しまうこと。この点に関してはできない子の移動は手伝ってよいが、玉は自分で持たせるように徹底しました。次に、相手方の陣の箱に入れにいつてしまうこと。これに対しては、母親に陣の所にももらうと間違ひなく帰ってくるようです。第三に、玉を両手に抱え込んでしまう子と一つずつ持ってくる子がいて、大笑いになりましたが、この点は何も指導せずに子どもに任せました。

以上、いくつか種目を上げてみました。更にこの子らに合った運動を考え、それを日々の保育の中で実践し、その表れとして運動会に入れていきたいと考えています。又、これまで、肢体不自由の子がいるから等の理由から屋内運動会を企画してきましたが、屋外ではどうかと考えています。

行事の報告

で
た
あ
!



遊びと子どもの発達③

加古里子

(歩行跳躍疾走の遊び)

出生した子どもが、成長を示す大きな行動の一つに、二つの足で立ち上って歩く事がある。それまでベッドにねていたり、はいはいをしたり、時にはつかまり立ちをする事はあっても、二足直立歩行を人間の特長のひとつとすれば、まだ人間のワク内に入らない期間だと言う事ができる。「人間は早産である」といわれる一つの誕生であるが、ようやくその充足の時期は、生後10～15月の間、達成される。しかしその歩行動作も一ぺんに成就されるのではない。

新生児の有する原始反射のうち、他の諸行動と同じく「自動歩行」と呼ばれる、支えられて床に足を就けるように保持してやる

と、二足を交互にふみ出す脳幹部の司る反射行為が基礎となつて、他の情動の髄鞘化進展と共に、やがて自覚し意識された意図にもとづく歩行動動となつてゆく。¹⁾

尻もちをつき、つまづきながら、ようやく自らの力で歩行できるようになったその年内即ち生後十二～二十四月の間、子どもの歩行は一日千から五千歩を数えるに至る。以来三歳では一万歩をこえ、四歳から五歳までの間二万～三万歩に達し、概ね人間一生のうち、最大の歩行数に達する。因みに成人主婦は一万二千歩であるにすぎない。²⁾

この激しい歩行動作は何を物語るのであろうか。専門家はこう

した人間特徴としての直立歩行能力を、人生初期の少くとも六歳迄の間にしっかりと確立する為、平衡性や安定した重心移動、それが成しうる為の足の裏における二重アーチ型の保持力、いわゆる土ふまずの形成を完成する為であると指摘する³⁾。

そしてそれは人間の体軀を支える事により、両手を完全に解放し、自由になった手を駆使する事によって道具や労働や工作を遂行し、それを可能とする為に大脳が発達し、発達した大脳が更に器用に巧みに指や手を随意に使い、その刺激が更に知恵をまし、大脳を発達させる源となる。しかも完全な歩行という事は、一方の足を前にふり出す際、残った一方の足で平衡をくずす事なく支える力と、重心の移動を巧みに行なう事を要するのであるから「歩行」は単に「二足直立能力」だけではなく「一足直立能力」を要する事となる。

片足で立つ力は、三歳頃までは未だ不十分であり、四歳、五歳、六歳で、夫々四、五、六秒間持続されるものである。またスキップができるようになるのは、四歳児にならなければならぬ。これ等の事と前記した歩数と照応する時、こうした直立歩行能力を持つに至るには四―五歳の期間を要している事がわかる。

一方歩行と共に走る能力を子ども達は身につける。しかし疾走と歩行の差は、ある瞬間において、両足が床面を離れているかい

ないかに置くとすれば、疾走能力は、跳躍能力、すなわち、床面を強くけつて上体を高くはねあげ、再び着地した際、平衡をくずす事なく安定した姿勢を保ち、その姿勢が次の跳躍体勢に直ちにつながっている必要がある。

こうして歩行―疾走―跳躍は、二足直立という力をもった人間の、当然負うべき基本的な能力となり、しかもそれは単に足や脚だけではなく全身の筋肉の緊張と柔軟性、鍛錬につながるばかりでなく、大脳神経と手指の巧緻性とかく結んでいるのであるから、成長する子どもとしては当然完全に獲得しなければならぬ能力となる。

こうした成長要求は、前述のような激しい歩数の示すトレーニングとなるだけでなく、それを誘い、完結させる為、「遊び」の形による展開が、各種各様に行なわれる事となる。

その一つに「鬼ごっこ」が挙げられる。鬼ごっこの遊びは、民俗学的には古代ギリシャのミノタウルの魔神の神事や、日本では「鬼やらい」や「鬼追ひ」の信仰行事がもととなり、その形態をまねて子ども達の遊びと化し、定着したものといわれている。邪鬼を追うにしろ、恐怖の化身である鬼が追いかけるにしろ、何れにしても捕えようとする者がいて、それから逃れるよう走る、追うという最も簡純明快な形をとる。従って幼児に於いてはこの明

快さが遊びとして好適なものとなる。そして前述した如く、多くの歩数を消化する満足が得られる。

だが単にそれだけが鬼あそびであるなら、走力競技か疾走レースと同じであり、脚力の強い子だけの満足と、つかまる迄の短いスリルだけという事となるだろう。脚力の劣る者や充分發揮できない子は常に不満をかこたねばならぬし、逃げたとしても直ちに捕まり、追う立場になればいつまでも交替できぬ事となって「遊び」はそれで終息してしまう事となる。

一般の体育レースと遊びとしての鬼ごっこの差は、この処理にある。⁴⁾それは弱小の者が強大な鬼に追われるようになって、出来るだけ両者を対等か同等の力あるような処置や工夫がしてあるという点である。例えばまだ足の弱い幼児と、やや強い小学生が、鬼ごっこをする場合、そして幼児が追われてつかまりそうになった場合、しゃがみこめばもはや鬼の魔手は及ぶ事が出来ず、しゃがんでいる間はつかまえる事ができないという「しゃがみ鬼」というルールが加えられ、それに両者共に対等に追い逃げる遊びを満喫できる事となる。こうしてしゃがんでいる間、呼吸をととのえ、次の新たな方向へまた逃げる力が回復できる事となるが、他の短距離レース等ではこうした方法はとる事が出来ない。

しゃがむばかりでなく、立木にさわれば「立木鬼」手をつなぐ

事によって鬼にハンデを附したり、逃げ手にハンデをつけたりという「手つなぎ鬼」や「つなぎ鬼」或いは「はしご鬼」等という形が工夫される。又あまりに遠距離へ逃げてしまわない様、にげる範囲を図形で制限した「島おに」やその図形を様々に変化させた「田の字鬼」「ミカン鬼」「井の字鬼」など、極めて多種多様な遊びが、こうして次々とみ出されるようになったのである。⁵⁾

(この項続く)

参考文献

- 1) T・パウアー「乳児の世界」(一九七九) ミネルヴァ書房
- 2) 阿久津邦男「からだと運動」 幼児の発達百科 (一九七三) フジ総合研究所
- 3) 香原志勢「人類生物学入門」(一九七五) 中央公論社
- 4) 加古「日本の子どもの遊び」(一九七九) 青木書店
- 5) 加古「子どもと遊び」(一九七五) 大月書店



音楽取調掛編纂「幼稚園唱歌集」における

欧米幼稚園唱歌・学校唱歌のとり入れ方

藤田 芙美子

日本の幼稚園での唱歌教育は、明治十年の東京女子師範学校附属幼稚園での「保育唱歌」実践にはじまり、音楽取調掛編纂「小学唱歌集」「幼稚園唱歌集」へと教材を変遷してゆく。これらの教材を特に音楽様式面から眺めると、その発展には日本の西洋音楽撰取の歴史を反映しているともいえるものがみられる。又各時代の教材は、今日の幼稚園での音楽教育を築く基となったところの様々な特色をもっている。このような特色をもった幼稚園音楽教材の内容を明らかにし、その教材を幼児達が保育者達がどのようにとり入れ、どのように継承してきたかを調査し考察すること

は、制度的に比較的自由な立場にあった幼稚園という場での実践

であるだけに、意味のあることに思われる。今日のわれわれ日本人の音感覚の様相を知るための、又、これからの幼稚園での音楽教材を考えるための手がかりの一つになるであろう。

本稿は音楽取調掛編纂「幼稚園唱歌集」（明治二十年刊行）をとりあげ、その楽曲が当時の欧米唱歌教材からどのように採用されたかを中心に調査を行ない、そこに含められた音楽の種類を明らかにすると共に、その楽曲が当時の幼稚園教育に与えた影響を考察しようとするものである。

I 「幼稚園唱歌集」作成の経過

幼稚園での唱歌教育は学校唱歌教育に先んじて明治十年に東京

女子師範学校附属幼稚園で「保育唱歌」の実践をもってはじめられた。それは欧米フレーベル系幼稚園書の翻訳書「幼稚園」及び「幼稚園記」の唱歌遊戲を参考にして、主に歌詞を当時の附属幼稚園関係者が作り、曲を雅楽課伶人達が作曲したものであった。

このような幼稚園での唱歌教育の試みとは別に、学制が制定されて以来文部省の懸案の事項であったところの学校唱歌教材作成にとりかかったが、既に実践されていた「保育唱歌」については早い時期から調査を行なっていた。^(注3)「小学唱歌集」「幼稚園唱歌集」と「保育唱歌」は、作成の手順において共通する点が多い。

一方、音楽取調掛は作成した唱歌の実践においても東京女子師範学校附属幼稚園とは協力関係にあった。メイスンは音楽取調掛着任のために来日すると間もなく東京女子師範学校及び幼稚園に出向いて音楽指導をはじめている。^(注4)この指導はメイスンが帰国する明治十五年七月まで続けられるが、その指導成果は他の実践校の上級生徒にくらべてめざましいものであったという。^(注5)

幼稚園児達が唱歌にめざましい進歩を示していたことは音楽取調掛が明治十五年一月に二日間にわたって催した第一回成績報告音楽会に園児達が出演することにもあらわれている。この時、後に「幼稚園唱歌集」に収録される唱歌「数へ歌」「進め進め」「ますらお武士（心は猛く）」「我門（ここなる門）」「蝶々」「霞か雲

か」の六曲が発表される。又明治十五年七月のメイスン送別音楽会においてもこのうちの「我門」をのぞく全曲が附属幼稚園児達によって歌われている。^(注6)

歌詞の編纂過程については、山住正己氏著「唱歌教育成立過程の研究」^(注7)に詳しいので、ここでは重複して述べないが、編纂過程において特に重要な修正変更は行なわれていない。今日歌詞草稿は第一案から第四案まで残されているが、第四稿には当時東京女子師範学校附属幼稚園で実践されていたと考えられる遊戲唱歌「雁の輪」と、保育唱歌の遊戲歌「めかくし」「家鳩」「民草」が含まれている。この四曲は刊行本には含まれないが、編纂の過程において「保育唱歌」を数曲採用しようとする意向があったことをはっきり示している。又この期に音楽取調掛と東京女子師範学校附属幼稚園主任保姆の唱歌についての意見交換が行なわれていることから、^(注8)第四案には当時の幼稚園保姆清水たづの直接の意見が加えられていることが考えられる。

以上に述べたように「幼稚園唱歌集」の編纂にあたっては、音楽取調掛が東京女子師範学校附属幼稚園での唱歌遊戲の作成と実践の経験を直接に間接に反映していたことが十分に考えられるのである。

「幼稚園唱歌集」には巻頭に次のような内容の緒言が添えられ



ている。

一、本編は児童が始めて幼稚園に入り、他人と交遊することを習うにあたって、嬉戯唱和の際、自ら功德を涵養し、幼智を開発する為に用いる歌曲を編纂したものである。

一、唱歌は幼稚の性情を養い、発声の節度の習慣をつけるものであるからことに幼稚園で必要である。諸種の園戯も音楽の力を用いなければ十分に効果を奏することはできない。

一、幼稚園の唱歌は特に拍子と調子に注意しなくてはならない。

拍子がゆっくりすぎると活発爽快の精神を損じ、調子の高低がその度を過ぎると音声の発達を害するだけでなく幼児は嫌になり、性格がのびのびと明るくなることを妨げる。本編はこれらの点に注意して選定した。

一、幼稚園には箏、胡弓、洋琴、風琴のような楽器を備えて幼稚園の唱歌に協奏することを要す。楽器によって唱和の力を増し、深く幼心を感じさせることができる。

ここには幼稚園での唱歌活動の目標、必要性、実践にあたっての注意事項が具体的に述べられている。しかしこの緒言は音楽取調掛に一冊だけ保存されていたフレイベル系幼稚園書、ウィーベ(Wiebe, E.) 著 "The Songs, Music and Movement Play of the Kindergarten" (Liverpool: Philip Son & Nephew, New York: E. Steiner) (註9) の序文内容にほとんど一致するものである。この書の唱歌から「幼稚園唱歌集」に採用した楽曲も多いことから、序文内容もそのまま做ったことが考えられる。

その内容は「徳性の涵養」を中心目標としている「小学唱歌集」の緒言にくらべてより具体的であり、幼児に即し、音楽に即している。

II 「幼稚園唱歌集」の楽曲構成

「幼稚園唱歌集」には全部で二十九曲の唱歌が収録されている。

る。この二十九曲の性格をできるだけ正確にとらえるために、これらの曲が当時の欧米のどのような唱歌集から採用されるに至ったかを調べてみた。これまでの研究と今回の調査の結果、二十一曲についての原曲及び作曲者等が明らかになった。表(p 52-53)はその結果を示すものである。出典は「幼稚園唱歌集」編纂当時までに文部省に輸入されていて参考とされたと考えられる外国音楽教科書、幼稚園書、唱歌集の唱歌を「幼稚園唱歌集」のそれと照合して調査した。

表から、楽曲内容の判明している二十一曲が次のような構成になっていることがわかる。

- 一、外国の音楽教科書から採用した唱歌 十七曲
- 二、邦人作曲作品 三曲
- 三、わらべうた 一曲

外国音楽教科書から採用された十七曲については更に次のような経路が考えられる。

- 一、Hohmann 編ドイツ教科書→Mason 編アメリカ教科書→(小唱歌集)→幼稚園唱歌集 (「蝶々」) (「霞か雲か」) 「雨露」 「やよ花楼」 「燕」 「蜜蜂」 六曲
- 二、Wiebe 編イギリス幼稚園書→幼稚園唱歌集 「真直に立」 「うづまく水」 「兄弟妹」 「操練」 「羽」

の鳥 六曲

- 三、Ronge 編イギリス幼稚園書幼稚園唱歌集 「雀」 一曲
- 四、Training School Song Book イギリス教科書→幼稚園唱歌集

「進め進め」 「若駒」 「環」 三曲

- 五、アメリカ教科書→幼稚園唱歌集 「心は猛く」 一曲

ここには二通りの特徴的な流れがみられる。即ち、一、四、五、のメイスンを通してもたらされた欧米学校音楽教科書から採用されたものと、二、三、の欧米幼稚園書から採用されたものである。このように欧米学校教科書と幼稚園教育書からその楽曲の大半を採用している「幼稚園唱歌集」は、当時の欧米の唱歌教材の特色も又そのままに反映したものになっている。楽曲の種類としてはドイツ、フランス、スペイン民謡が七曲、フランスとドイツのポピュラー・エアが二曲、作曲作品が三曲含まれていて、欧米の民謡及び民謡風作品がその中心をなしている。

日本の楽曲は全部で四曲。内訳はわらべうた一曲、作曲作品三曲である。

楽曲の特徴として次の事柄があげられる。

〈音域〉

二十九曲中二十一曲が1オクターブ以内の曲で、音高はh—f²まで。ウィーベが序文に述べている幼児に適当な音域の制限b—

でに限られている。

〈調性〉

雅楽的旋法（無半音5音）の「風車」、都節音階（有半音5音）の「数へうた」 $\text{dmoll} \rightarrow \text{Fdur}$ に転調する「川瀬の千鳥」をのぞいて他全部がdurの曲である。GdurとFdurの楽曲が二十曲で全楽曲の大半を占めている。ただしdurの楽曲の中には「f」と「t」を用いないそして日本的音型である上から「短3度・長2度」「長2度・短3度」の順次進行を手がかりにしている典型的な「ヨナ抜き音階」（無半音5音）の曲「友どち」が含まれている。この曲は作曲者は判明していないが、この音型の特徴から邦人作曲作品と考えられる。^{（譜例1）}又、全音階的旋律進行をする「t」を用いない西洋楽曲も多い。^{（譜例2）}これは9曲含まれている。

伊沢修二作曲「子ども子ども」「花咲く春」はいずれもGchで書かれていて「t」を用いない6音域の楽曲である。そして先に述べた日本の音型「短3度・長2度」「長2度・短3度」の特徴的な進行を随所に用いたものである。それは6音域を用いた他の西洋楽曲が旋律進行において全音階的・和声的・3和音的・ゼクエンツ的であるのに比べて違った旋律印象を与える。^{（譜例3）}

〈拍子〉

2/4拍子が十二曲、4/4拍子が十曲、6/8拍子が五曲、4/8

拍子が二曲

これらの特徴をウィーベ幼稚園書の唱歌遊戯の楽曲の特徴と比較してみると、多く用いられている調、拍子について、又短調が含まれられずほとんど長調であることは全く共通した特徴であることが認められる。しかし、ウィーベには全体の17%含まれている3拍子系の楽曲が、「幼稚園唱歌集」には全く含まれていない。

以上「幼稚園唱歌集」の楽曲の特徴は次のようにまとめられる。その大半の楽曲が当時の欧米学校教科書及びフレーベル系幼稚園書の唱歌をそのままに採用したものである。したがって当時の欧米唱歌教材の特徴である欧米の民謡が中心になっている。それは5音から8音の狭い音域のもので、全音階的な旋律進行をする長調の曲である。音階音の第7音を用いない楽曲が多い。一方、わずかながら邦人作曲作品も三曲含まれている。この三曲には各々に全音階的枠内で日本人が歌うための初期の試みが認められる。

Ⅲ 「幼稚園唱歌集」の実践

「幼稚園唱歌集」は明治十六年中に編纂は完了していたと考えられるが、何故か刊行されるのは明治二十年になる。この間、明治十七年頃から東京女子師範学校及び各地に開設された幼稚園

第七

1. ひまわりを きたれ ながく とよ いそいそ
 2. ひまわりを きたれ いざや コロ ながく のみちを
 アナバテ まし うみ ながく うたがえ テア ニきき
 まにー まい とろ あれなら も さも べも に

譜例 1

第十三

1. アメツ エ ウルカーヒ デー ミヤマーハ ホエ
 2. あらつ き ゆきふて めー そのふーに はなび
 サクラハ ワーラヘリ イザユカン ウチムーレ デー
 にはにーは たーましく みよみよ ぐく かいき

譜例 2

第三十二

1. ミミ ヨヨ ミミ ヨヨ ロロ ママ キタ ママ ウツ ツツ ママ クク
 2. ミミ ヨヨ ミミ ヨヨ ロロ ママ キタ ママ ウツ ツツ ママ クク
 ナミ ヨヨ ナミ ヨヨ ナミ ヨヨ ナミ ヨヨ ナミ ヨヨ ナミ ヨヨ ナミ ヨヨ
 ロロ ママ ロロ ママ ロロ ママ ロロ ママ ロロ ママ ロロ ママ

第十五

ハナサク ハルノ アウボノ ラ ハヤトク オキチ ミヨカシ
ト ナクウダ ヒスモ ココロシ テ ヒトノ ユメヲジ
サマシケ ル ホホケ キヨ ホホケ キヨ ケキヨケキヨケキヨ
ホホケキヨ ホホケキヨ ホホケキヨ ケキヨケキヨケキヨケキヨ ホホケキヨ

譜例 3

で、唱歌教材として稿本のまま用いていた記録が残っている。^(注11)

又、明治二十年代になると各地で子どものための唱歌集が多数発行されるようになり、それらの唱歌集に「幼稚園唱歌集」の唱歌が転載されるようになる。「幼稚園唱歌集」の稿本の写しは各地に広まり、その発行が望まれていたらしい。このことは「幼稚園唱歌集」を文部省が刊行する明治二十年十二月に先んじて同年三月、四月にそのほとんど全容を含む唱歌集が大阪で東京で発行されていることから推察することができる。^(注12)

「幼稚園唱歌集」の楽曲が実際にどの程度幼稚園で用いられていたかを知るために、東京女子師範学校附属幼稚園での「幼稚園唱歌集」実践の経過を追ってみたところ、明治二十六年に「蝶々」「風車」「ここのなる門」「数へうた」「霞か雲か」「うずまぐ水」の六曲、明治三十九年には「風車」「蝶々」の二曲、というように次第に実践される唱歌の数が減ってゆく。^(注13)そして明治三十四年に出版された「幼稚園唱歌」（東くめ、滝廉太郎他作詞作曲）他の唱歌集が多く用いられるようになる。

「幼稚園唱歌集」の唱歌が次第に用いられなくなる理由は、歌詞が文語体であるために幼児に理解されにくい。遊戯法が付記されていないので「遊びながら歌う」幼稚園では用いるのに不便である。等が考えられているが、その後の幼稚園で用いられる唱歌

が再び邦人作曲作品中心になること、「幼稚園唱歌集」の唱歌が実践され残ってゆく点で「保育唱歌」よりも根強くなかったこと等考えあわせると、全音階的、和音的旋律進行をする長調の楽曲で、西洋のリズム型の欧米民謡の旋律をそのままに歌うことは、当時の幼児にとって保育者にとって難しかったことが加えて考えられる。比較的長く歌われた唱歌が「数へうた」「風車」のような日本的旋律進行のものであること、西洋歌の中でも「蝶々」「ここなる門」「うずまく水」等、音域の狭いリズム型も単純なものに限られているのはこのことを示しているのではないだろうか。

明治三十年代に入ると、これまでの幼稚園の遊嬉及び唱歌のあり方が反省されるようになるが、明治三十九年制定の「女子高等師範学校附属幼稚園保育要領」の唱歌についての記述は、「保育唱歌」「幼稚園唱歌集」等を実践した結果の歌詞について楽曲についての反省を明確に示し、唱歌教材の転換を示唆しているのでその内容をここに記しておく。

一、歌詞は幼児に理解し易い談話体、普通文体とする。

二、歌詞内容は幼児の興味を起すのに適当なものであること。

三、楽曲は音域が広すぎず、音程が簡単で、拍子は $\frac{4}{4}$ あるいは $\frac{2}{4}$ のものとす。

(国立音楽大学)

※

※

※

原曲の収録文献及び

原曲に関する参考文献(注10)

	調 性	旋 法 他	拍 子	音 域
(伊)	F dur		$\frac{2}{4}$	c' ~ b' (s ~ f) 7音域
(伊)(伊 ₂)(遠)(M)(F)(小)	G dur		$\frac{2}{4}$	g' ~ d ² (d ~ s) 5音域
(伊)(遠)(NM)(F)	F dur		$\frac{2}{4}$	c' ~ d ² (s ~ l) 9音域
(伊)(遠)(M)(M・B・A)(H)	D dur	t を用いない	$\frac{4}{4}$	d' ~ d ² (d ~ d')
(W)(D)(小)(NM)	E dur		$\frac{4}{8}$	es' ~ es ² (d ~ d')
	C dur		$\frac{8}{8}$	g' ~ e ² (s ~ m) 6音域
	G dur	t と f を用いない 無半音 5 音階	$\frac{4}{4}$	d' ~ d ² (s ~ s)
(遠)(伊小)	G dur	t を用いない	$\frac{2}{4}$	d' ~ d ² (s ~ s) 8音域
(遠)(M・B・A)(M)(NM)(F)(B)	G dur		$\frac{2}{4}$	d' ~ d ² (s ~ s) 8音域
(遠)	G dur		$\frac{8}{8}$	d' ~ e ² (s ~ l) 9音域
(NM)	d moll → F dur	t を用いない	$\frac{8}{8}$	c' ~ f ² (d ~ d')
	G dur		$\frac{8}{8}$	d' ~ d ² (s ~ s) 8音域
(M)(M・B・A)(H)	Es dur	1t を用いない	$\frac{8}{8}$	es' ~ es ² (d ~ d')
	F dur		$\frac{4}{4}$	f' ~ d ² (d ~ l) 6音域
(遠)(伊小)	G dur		$\frac{4}{4}$	g' ~ e ² (d ~ l) 6音域
(遠)(M)(H)(W)	F dur		$\frac{4}{4}$	c' ~ f ² (d ~ d')
(M)(H)(W)(D)(B)	G dur	f を用いない	$\frac{4}{4}$	d' ~ d ² (s ~ s) 8音域
(W)(D)	F dur		$\frac{2}{4}$	c' ~ f ² (s ~ d')
	F dur		$\frac{4}{4}$	f' ~ f ² (d ~ d')
(伊)(遠)(H)(M)(W)(NM)	G dur		$\frac{4}{4}$	d' ~ c ² (s ~ f) 7音域
(遠)(P)(W)(F)	G dur		$\frac{2}{4}$	g' ~ e ² (d ~ l) 6音域
(遠)	F dur		$\frac{2}{4}$	f' ~ d ² (d ~ l) 6音域
(R)(P)	A dur		$\frac{2}{4}$	e' ~ d ² (s ~ f) 7音域
(W)	F dur		$\frac{4}{4}$	c' ~ f ² (s ~ d) 11音域
(W)(D)(Bö)	F dur		$\frac{2}{4}$	c' ~ d ² (s ~ l) 9音域
(保)		変調律旋・ 無半音 5 音階	$\frac{2}{4}$	d' ~ c ² (d ~ r')
(遠)(H)(M)(NM)	G dur		$\frac{2}{4}$	g' ~ d ² (d ~ s) 5音域
(W)	A dur	都節音階・ 有半音 5 音階	$\frac{2}{4}$	e' ~ d ² (s ~ s) 8音域
(伊)(遠)(伊小)			$\frac{4}{4}$	h ~ e ² (m ~ l) 11音域

表「幼稚園唱歌集」の楽曲構成

	作	詞	作曲
1 心は猛く	里見義		Mason, Lowell
2 蝶々	野村秋足・稲垣千顔		スペイン民謡
3 進め進め	加部 巖夫		フランス民謡
4 霞か雲か	"		ドイツ民謡
5 学べよ			
6 にはつ鳥			
7 友こち			
8 子ども子ども	伊沢 修二		伊沢 修二
9 若駒			Hering, Carl Gottlieb
10 大原女			ドイツ民謡
11 川瀬の千鳥			
12 竹むら			
13 雨露			Reichardt, Johan Friedrich
14 冬の空			
15 花さく春	伊沢 修二		伊沢 修二
16 やよ花楼			ドイツ学生歌
17 燕			ドイツポピュラーエア
18 真直に立てよ			
19 我大君			
20 ここのる門	加部巖夫・豊田英雄		
21 うずまく水			フランス・エア
22 環			支那旋律
23 毯			
24 兄弟妹			
25 操練			ドイツ民謡
26 風車			東儀 季 熙
27 蜜蜂			ボヘミヤ民謡
28 一羽の鳥			
29 数へうた			日本わらべうた

注1 桑田親五訳「幼稚園」 文部省発行 上巻明治九年 中巻

明治十年 下巻明治十一年

関 信三訳「幼稚園記」 東京女子師範学校発行 一卷—三

巻明治九年 附録明治十年

注2 藤田芙美子「保育唱歌研究——フレibel式幼稚園唱歌遊

戯移入の経過を中心として」国立音楽大学創立五十周年記念

論文集参照

注3 東京芸術大学図書館編 音楽取調掛時代所蔵目録2

10・11諸向往復書綴 6 明治十三年六月二十五日 東京女

子師範学校並びに幼稚園で使用中の唱歌類音楽取調掛にて入

用につき回付依頼

明治十三年六月二十八日 右の回答 この後、東京女子師範

学校と「保育唱歌」に関する問合せの往復文書が度々かわさ

れている。

注4 伊沢修二「音楽取調成績申報書」明治十七年、p.232

「東京女子師範学校ニ於テハ明治十三年四月本科生及附属小

学生ニ伝習ヲ始ム同十四年二月予科生ニ之ヲ施シ同九月幼稚

園ニ及ボス」

注5 伊沢修二 前掲書 p.223—p.224

倉橋惣三 新庄よしこ「日本幼稚園史」フレibel館 明治

三十一年 p.283—p.285

6 東京芸術大学音楽取調掛研究班編「音楽教育成立への軌

跡」音楽之友社 昭和五十一年 p.467 明治十五年一

月三十、三十一日演奏会プログラム

p.471 明治十五年七月一日 メーソン送別会プログラム

注7 山住正己「唱歌教育成立過程の研究」東京大学出版会 昭

和四十二年 p.112—p.115

注8 東京芸術大学前掲書

49・50往復書類 明治十七年

63 明治十七年三月三十一日 女子師範へ保育唱歌取調に

き主任一人出校の依頼

注9 出版年是不詳であるが、一八六九年発行“Wiebe, E. Para-

dise of Childhood”の付録であるとの記述があるのでこの頃

の出版と考えられる。

音楽取調掛所蔵のものは第二版である。

注10 原曲の収録されている文献

1. Hohman, C.H. “Practical Course of Instruction in Singing”

Part I, Part II, Part III. 1856—1858 (H)

2. Mason, Baldwin, Locke, Aiken “The Youngest Singer”

Part I, Part II. 1860 (MBA)

3. Mason, L.W. "First National Music Reader" 1870 (M)
Mason, L.W. "Second National Music Reader" 1870 (M)
Mason, L.W. "Third National Music Reader" 1871 (M)
 4. Ronge, J. and B. "Practical Guide English Kindergarten" 1855 (R)
 5. Wiebe, E. "Songs, Music and Movement Plays" 1869 (W)
 6. Douai, A. "The Kindergarten" 1871 (D)
 7. "Plays and Songs for Kindergarten and Family" 1874 (P)
原曲に関する参考文献
伊沢修二「唱歌略説」東京芸大稿本(伊)
伊沢修二「唱歌略説」上伊那稿本(伊2)
遠藤 宏「明治音楽史考」(速)
Mason, L.W. "The New First Music Reader" 1892 (N.M)
音楽取調掛「小学唱歌集」(小)
伊沢修二「小学唱歌」第一卷—第六卷(伊小)
McCaskey, J.P. "Franklin Square Song" 1881 (F)
Berry, E. "Kindergarten Songs and Games" (B)
Reclam 版 "Kinderlieder" (K)
Böhme "Lieder de Deutschen 18 und 19 Jahrhundert" (Bo)
- 注11 文部省第十二年報 東京女子師範学校明治十八年十月二十

- 七日付 明治十七年度報告書、附属幼稚園規則に、「幼稚園唱歌集、幼稚園遊嬉ハ未タ出版セザレドモ稿本ノマ、仮リニ用フ」の記述有
- 東京都編「東京の幼稚園」都史紀要14 昭和四十一年 p.46
深川幼稚園保育課程表中、「……幼稚園唱歌集幼稚園遊嬉ハ未タ出版セザレドモ稿本ノママ仮リニ用フ、但以上ノ教書ハ東京女子師範学校ノ稿本ヲ借用謄写ス」の記述有
- 注12 真鍋定造編「幼稚園唱歌集」大阪普通社 明治二十年三月出版
増山英次編「幼稚園・小学校 こども歌」香雲書楼 明治二十年四月出版
- 注13 下田たづ筆「東京女子師範学校附属幼稚園分室ニ関スル事」の唱歌に関する記述 大正十四年記
「女子高等師範学校附属幼稚園保育要領」女子高等師範学校 明治三十九年

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究（三十一）——

津 守 真

五歳の子どもが、こんなに他人の気持を理解し、他人に対して温かい関心を持っているのかと驚かされたことが幾度もある。五歳になるとそれが言語を伴って表現されるので、こちらも驚くことになるのだが、それは五歳で突然わかるようになったのではなく、それまでの五年間の毎日の生活の中で、子ども自身が他人との間で体験してきたことの積み重ねの上に成り立っていることである。子ども自身が、おとなから温かい関心と理解をもって扱われた体験がなかったら、他人に対して同様の態度で接することはできないであろう。こういうことこそ、幼児期に生活の中で体験できることであり、それによって子どもは生物的存在から人間へと成長してゆくのである。

あげること・贈ること——他人への積極的関心

8月9日

A 「ね、キフってどういうこと？」

私 「どういうことだと思う？」

A 「ためらいながらいう」「ものをあげることでしょ？」

私 「そう」

A 「こないだ お店やさんで、ほうずきをくれたのキフ？」

私 「それはおまけだね」

A 「あ、そうそう、オマケ」

子どもがこういう質問をするのは、このことは意味すること
を、子どもは漠然と分っていて、それをおとなに確かめたいから
であろう。このことばでどういうことを考えているのだろうかと思
って、私は「どういふことだと思ふ？」とたずねる。Aは自分
の考えていることが合っているかどうかためらいながら、「もの
をあげることでしょ？」と云う。「寄付」という語に含まれる社
会的価値や対人関係は、子どもの理解の中にはないだろうが、そ
の基底となっている行為は、子どもは体験し理解しているように
思われる。寄付という行為の中心をなしているものは、他人に金
や物をあげることに、すなわち、ものをおくることであって、心
こめて他人に物を差し出すことである。

Aはすぐにそれと類似の行為を思い出す。八百屋で野菜を買っ
たときに、やおやのおじさんが子どもに差し出してくれたほおず
きのことである。それは具体的な行為においては寄付と同じであ
る。しかしそれは品物を買ってくれたときに、値引きする代りに
附加してくれる物であって、「おまけ」である。

Aは他人に物を贈ることに関心をもっているので、こういう質
問が出たといえよう。

10月4日

A「赤い羽ってどうするの？」「困っている人にあげるの？」

私「0さんの養護施設にもいくんだよ」

A「0さんのところ、おこづかいももらうんだよ」このことを何回
も云う。

ここでも、赤い羽について質問するとき、その答えを子どもは
漠然と分っている。それで「困っている人にあげるの？」と重ね
て質問する。私が知人の0さんの働いている養護施設にもいくこ
とを云う。Aは先日0さんがきたとき、養護施設の子どもはお小
遣いをもらう話を熱心にきいていた。五歳のAはお小遣いをもら
っていないから、Aにとってはその子どもたちのところに赤い羽
のお金がいくというのは納得できないらしい。

Aがこういう質問を口に出してするのは、他の人に何かをあげ
ることがAの心の中で一つのテーマになっていることを示
すものであろう。

12月30日

朝、床の中で

A「きょうはPちゃんのお誕生日ねー、お母ちゃまと、なんのケーキにするか考えようねー。YちゃんはPちゃんに、イザワルシナイっていうお誕生日にするといいわ」

きょうだいの誕生日は、子どもにとっては楽しみなお祭りである。妹の誕生日にどんなケーキを作るか、朝目が覚めたときから、たのしみである。そういう一日の朝は、なんと明るく希望に満ちていることか。

妹の誕生日に何かを贈るとき、その人にふさわしい贈り物は何であるかをAは考える。そして、もう一人の妹のYちゃんは、意地悪しないというお誕生日がPちゃんにふさわしいという。そこで差し出すものは、物ではなくて精神である。その相手に喜んでもらえるものは、意地悪しないという心であり、それは自制によってつくり出される精神である。

1月31日

A「そういうときって、たいがいの人は怒りたくなるわよ。あたし 病気のとき、けいけんしたことがあるわよ」

妹のYがお腹がすいて、おとなが何を云っても怒りたくなかった

話を母親がしたときのことである。

他の人が怒るとき、同様の自分の経験を考えて、怒りたくなるときの心に共感し、それを客観的に見ている。他人の心の存在に對する関心と云えよう。

五歳児の後半の時期には、ここに掲げたことに類似した例を、他の子どもたちについても見るができる。この時期には、一般的に云っても、他の人の心に対する積極的な関心が出てくると云うことができそうである。おとなにこのように純粹な認識があるだろうかと思えるくらい、他人の心に近づいた理解の仕方で、他人に對して積極的な関心をもっている。こういうことは、おとなになるにつれて進歩するとは云い難いものようである。知的な理解はもっと進むかもしれない。しかし、他人の心に対する心情的な共感、もっと鈍ってくるようにすら思える。それは、子どもにふれることによって、おとなの心の中にも新たに回復されるものでもある。

こう云っても、子どもはいつでも他人の心に対する共感的関心を抱いているわけではない。次の瞬間に、子どもは、妹のもっているものをキュと取り上げて泣かしてしまふのである。怒らない

ためには、自制の努力を必要とするのである。

お母さんに時間をあげる

2月15日

数日前に、中川李枝子作の『ももいろのきりん』を買ってきた。Aに母親が最初の方をよんでやったが、字が多い本なのでなかなかとりつけないで、少し読んでは放ってあった。昨日、一時間くらい、居間のソファに坐って、自分で全部読んだ。私がどこが面白かったかたずねたが、なかなか口からことばが出てこない。母親が「魔法の画用紙がほんものになるところが一番好きだ」というと、Aは、「そうなのよ、あたしもそこがいちばん好きなのよ」と云う。この本の一冊のクライマックスのところを理解しているように思われた。

そのあと、Aは「マホウの画用紙」と云って、画用紙に家の内部のえをかく。もう一枚つなげてつづきをかき、さらにもう一枚、合計三枚をつなげて家の内部を描く。そして云う。

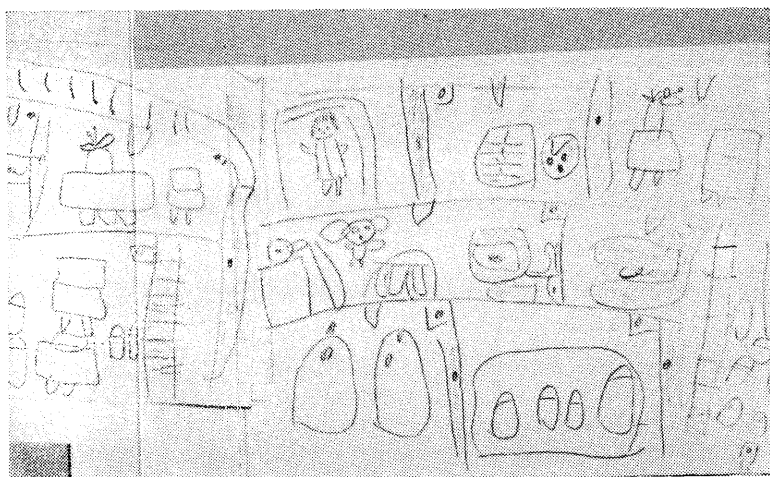
A「マホウの画用紙のなかのお母さんは、あみものするの、お母

さまには時間をあげるわ、あみものをするひまがあるのよ」

Aの母親は小さい子どもたちの世話に忙がしく、坐って編物をするひまなどない。Aはそのことをよく知っている。Aの母親にとって一番よい贈りものは、自分のことをする時間である。それでAは云う、「お母さまには時間をあげるわ、あみものをするひまがあるのよ」

このときかかれた描画（図1…次頁参照）をみると、これは子ども頭の頭の中にある象徴的な描画である。玄関の入口には、履き物が不均整に並べられていて、家に入るとき子どもたちの動きを示している。ドアはそれぞれピンクのクレヨンでぬられ、把手がついており、独立した部屋がいくつもある。梯子があつて、二階がある。各部屋には天井から突起が出ていて、黄色でぬられており、電灯が明るく照している。それぞれの部屋には、違った形が描かれていて、部屋によって特色があることを示している。ある部屋には戸棚があり、ある部屋には水道がある。卓子や椅子、花瓶、皿などのある部屋もある。何を示しているのか分らない物もある。

これは魔法の画用紙だから、この家はほんものになって出てく

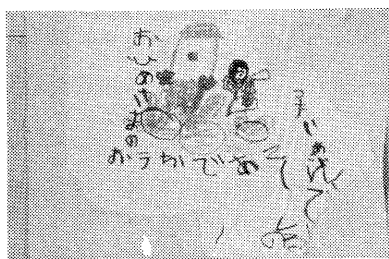
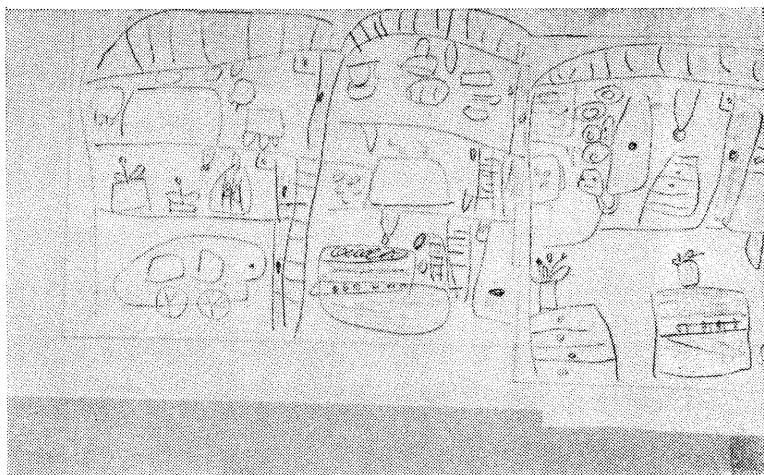


る家である。こんなにいろいろな部屋があるといいなあと子どもは思っているであろう。その家の中で、母親にはあみものをする時間（そしておそらく空間も）が与えられる。ここには母親に対する親しい関心が見られる。また母親が内心で欲しているものに対する内側からの理解がある。

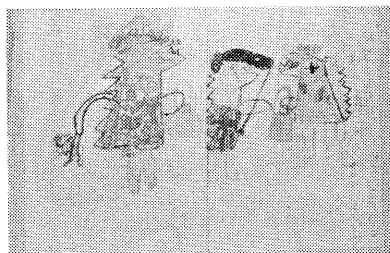
文字と思想

この本は字が主になっていて、挿絵が少ない。五歳児にとって、これだけの字の並んでいる本を全部よみきるのは容易でないはずである。Aは文字の読み書きについては、クラスの中でも早い方だったわけではない。また家庭でも、字を教えたり書き方を直したりしたことはない。けれども、字に関心が出てくると、たえずおとなにつきまとうたずね、先生や親を困らせた。

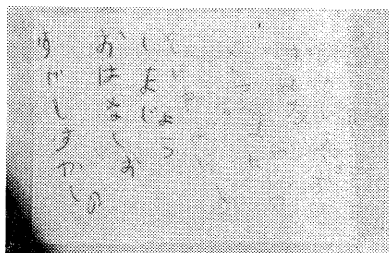
写真1は、五歳児の一学期五月にかいたものである。左上からはじまり、前半は青のクレヨン、後半は赤のクレヨンでかかれている。「むかしむかしのおはなしおもしろう それわほらあなぐまちゃんのおはなしおもしろう」と判読できる。



◀写真2

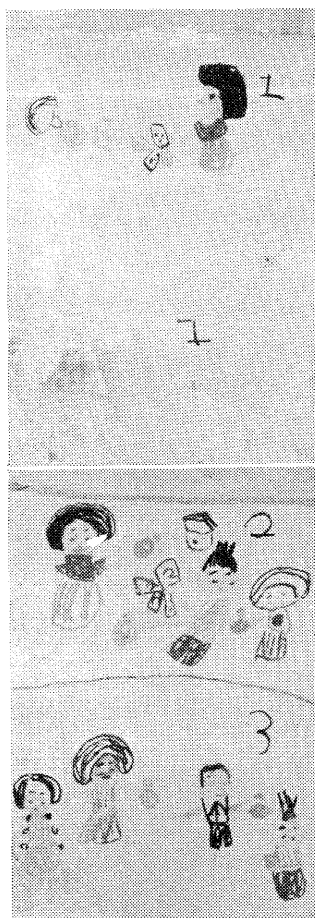


◀写真3



▲写真1

▼ 写真 4



五歳児二学期以後は、えをかいたとき、文字で補足をつけ加えることが多くなる。「おひめさまがおうちであそんでいるの」「おもしろいほん」「みんなのおうち」など、その字は不齊な部分が多いが、文字が描画の一部分をなしている。(写真2・3)

また、五歳児の秋には、小さい子どもたちが遊んでいるときも、ひとりだけ絵本をよんでいることがしばしば見られるようになった。次第に、文字が考えの世界をあらわすこと、また、自分も文字で思っていることをあらわすことを知ってきたようである。自分がおはなしをつくりながら、おとなにそれを筆記してもらうことが多くあり、丹念につきあうと、そういうときには目を宙に凝らして、精神を集中させた。もちろん、まだ描画で表現する方が

気楽であり、その方が多いのであるが、自分で精神の緊張を文字に向けることができたときには、自分の感情を文字に表現することに成功することもあった。写真4はその一例である。

「○ちゃんがわたしがとらんぶだしてきたのおみていました
 そしておかあさんとおとうさんと おにいちゃん とらんぶお
 しました それわうすのろまぬけでした おとおさまが おだい
 どころから みかんおだしてきました でも ○ちゃんがたべて
 しまいました それでよか(っ) たんです おとおさまがみかん
 おひとつ おおめにも(っ) てきたんです それからうすのろま
 ぬけおしました さいしょに おとおさまが…… しませんでし

た それから わたしがなくて
 しまいました どうしてなくて
 しまったか おはなししまし
 うだ(っ)て おとおさまが
 わたしがみかんおたら(おいた
 ら)おとうさまが ひ(っ)ば
 (っ) たんだもん きょうわ
 ここまでにしておきましょ
 う
 でわ きょうわきょうならにし

ましよう 1がつ22ち

ひとたび文字の面白さを知った子どもは、自分の心の中にあることを、文字で表現しようとする。少し前までは、文字を一字かくのも容易でなかった子どもが、自分で表現しようとする内容を持つているときには、忽ちそれを使いこなすようになるのは驚くほどである。早くから文字を教えたり矯正したりしていたら、自分の心にあることを気楽に文字に並べることをしないであらう。むしろ、生活の内容を豊富にし、人の心が分るようになっていくことが、幼児期にしておかねばならないことである。それをどうやって表現しようかと、子どもは苦心し、それによって技術としての文字も、思想表現の道具としての文字も、両方を習得してゆくのである。早期に文字を学ばせようとするために、おとなとの信頼関係や、友だちと十分に遊ぶという基本的な体験の機会を犠牲にしてはならない。

他人の気持を考え、他人が欲しているものをあげることを、贈ることは、Aがこの数カ月間、自分自身のテーマとしてきたことであったと思う。それは、子どもがずっと小さいときから、自分が

求めているものをおとなから与えられて満足した体験、きょうだいや友だちとの間の葛藤の中で子どもなりに考えさせられた体験によって、自分自身の中に形成されてきたテーマであると云えよう。それが五歳の後半になって、言語や文字の理解力や表現力の増大に伴い、明瞭な輪廓をもって認識されるようになったのである。五歳の後半は、このように、幼児期の体験が集約されて花開くような時期である。からだで体験し、心で感じ、そのイメージが集積されて人間の精神が形成されてゆくその一つの階段がここにある。この基本的な体験は、ここではまだ最初の認識の段階である。この後、成長と共に、くりかえしいろいろの形で体験され、再認識されてゆくのであるが、この五歳児の段階における体験と認識は決して幼稚なものではない。それはおとなになって思い起すことがあるならば、はっとするような、純粹な原体験であらう。ここに掲げたのはAにおける一つの具体例であり、子どもによって、幼児期に体験されるテーマは異なる。また、幼児期を十分に生きることができないと、内心の重荷の解決のためにエネルギーを消費させられて、人間的成熟へ向う体験をすることができないままに過ぎてしまう。幼児期に子どもは十分に遊ぶことが必要であり、そのためにきめのこまかい保育がたいせつなのである。

(つづく)

運動会や入園式などの行事を、子どもの側から見てみると、疑問を感じることが多いので、今月号では行事報告の特集を試みた。いずれも本誌の「私の保育」に執筆された優秀な先生方である。二十人程の方にお願したのであるが、六人の方から報告を頂いたのでそれを掲載した。どの園でも、行事は関係者の間で「綿密に」連絡し合い、準備にも、当日のことにも「気を配って」実施し、皆が気持ちよく過せるように工夫が重ねられていることがよく分る。先生たちがこれだけのエネルギーを使っているから、園による個性があらわれている。報告を寄せて下さった方々には、今後の工夫のための材料を提供して下さったことを感謝したい。

この行事報告を見て、私は幼稚園の生活は、人工的なつくりものではなくて、生きた実生活そのものであることを改めて考えさせられた。幼稚園の生活は、

ふだんは子どもと先生との生活であるが、行事になると、親や他のおとなたちも一緒に参加する。そしてそのときには、先生もただのおとなになって交わる。

園の側から言えば、それだけ大きなエネルギーを使っているから、子どもにもおとなにも満足のいく行事とすることができるのであろう。幼稚園の生活では、どこまでも子どもの日常の遊びが主である。先生のエネルギーの主たる部分はそこに注がれるのが至当である。行事は、ときに随性に流されがちな日常の反復に張りを与える。お誕生日やクリスマスが子どもに楽しみや希望を与えていることはだれもが身近に見るところである。また保育者は、幼稚園の先生も親も、日ごろ自分を抑えていることが多いから、ときに子どもと一緒にって愉快になるのは自然なことである。

行事が子どもの悩みの種にならず、楽しみとなるように願っている。(津守)

幼児の教育 第七十九巻 第二号

二月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年 一月二十五日 印刷
昭和五十五年 二月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

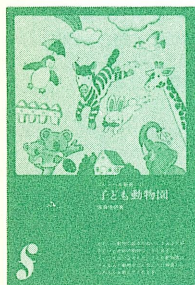
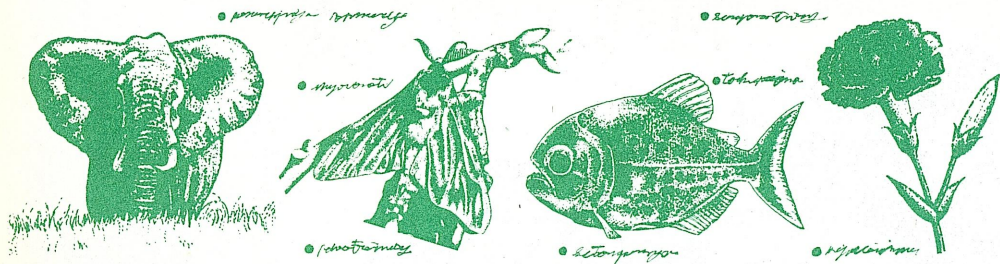
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

©本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

“自然”指導のための新書!!



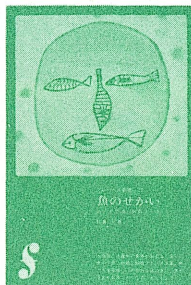
フレーベル新書21

子ども動物園

遠藤悟朗・著

●B 6 変型判 192頁
●定価650円 円120円

絵本やぬいぐるみの動物は好きでも本物は苦手……という子どものために、抱き方、餌の与え方、遊び方など具体的に動物と仲良くする技術を上野子ども動物園創設者である著者が教える。動物園うら話も多数収録。



フレーベル新書22

魚のせかい

—魚の不思議・飼育ノート—
杉浦 宏・著

●B 6 変型判 144頁
●定価600円 円120円

水旅館やこども電話相談室などで活躍中の著者が、園で魚や両生類を飼育する際のコツや見どころをアドバイス。多数の図版付き。めずらしい魚の子育て物語も収録されている楽しい本。



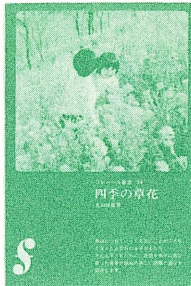
フレーベル新書23

たのしい昆虫教室

矢島 稔・著

●B 6 変型判 152頁
●定価600円 円120円

昆虫に関心をもち、自然に興味をもつような子どもになるには、保育者の適切な指導が大きな力となる。本書は昆虫の生活や、観察のポイント、飼育の際の注意などをていねいに紹介している。



フレーベル新書24

★★★新刊★★★ 四季の草花

丸山尚敏・著

●B 6 変型判 176頁
●定価700円 円120円

野山につれていっても遊ぶことができなくなったと言われる子ども達。そんな子ども達に、身近な植物をとりあげ、楽しい話題や遊び方、栽培のコツ等を紹介。自然への興味と愛情を育てる好著です。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

大きく伸びゆく お子さまのために…

フレーベル館の 月刊7誌



創刊



年長児のための新しい総合絵雑誌
キンダーメイト
おおぞら おかあさんもいつしょに
団体購読価 月 300円

豪華な上製本



科学する心を育て自然に親しませる
しぜん-キンダーブック 国
4月号 『なのはなと おし』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 300円

豪華な上製本



幼児の美しい心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号 『おかあさんの ふえ』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 300円

ワイド画面付



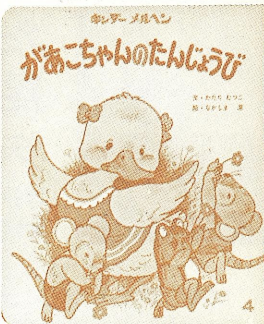
情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック 国-情操
4月号 『むくの おさんぽ』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円

ワイド画面付



観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック 国-観察
4月号 『はるを みつけた』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円

特製厚紙製本



幼児らしい夢をそだてる絵本
キンダーメルヘン
4月号 『がごちやんの たんじょうび』
●付録・こいのぼりの工作
団体購読価 月 200円



保育の実践に協力する
保育専科 - 今月のカリキュラム -
4月号
特集 80年代・私の保育ビジョン
定価 350円